秋田県文化財調査報告書第362集

元木山根Ⅱ遺跡

もときやまね

―地域用水環境整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００３・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、現代に生きる私たちは、産業経済を発達させ生活の利便性を高めて、より豊かな地域社会を形成したいという望みをもっております。本県の基幹産業である農業分野においても、内外の厳しい情勢に対処するため、各種基盤整備が急務となっており、さらなる効率化が求められていることは言うまでもありません。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、地域用水環境整備事業に先立って、平成14年度に昭和町で実施した元木山根Ⅱ遺跡の発掘調査成果であります。調査では、平安時代の竪穴住居跡などが発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県秋田総合農林事務所、昭和町、昭和町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

秋田県教育委員会

教育長 小　野　寺　清

例　　言

1．本書は、地域用水環境整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書である。
2．本書は、平成14年度(2002年度)に発掘調査した、秋田県南秋田郡昭和町大久保字元木山根に所在する元木山根Ⅱ遺跡の調査成果を収めたものである。
3．本書に使用した図は、秋田総合農林事務所提供の500分の１『地域用水環境整備事業計画図』と国土地理院発行の25,000分の１地形図『大久保』である。
4．本書第５章の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに依頼した。
5．遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2000年版に拠った。
6．本書の執筆は、第２章第３節を菊地与志人が、その他の部分を西村正人が担当し、磯村亨が加筆と訂正を行った。
7．本書の作成にあたり以下の方々からご教示を賜った。記して謝意を表する次第である。(敬称略)

門間光夫・瀬下三男

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出順に連番としたが、精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。また、遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝跡　　ＳＸ：性格不明遺構

2．溝跡(ＳＤ05・ＳＤ11)については、断面のみ記載し、平面上の位置は第７図(遺構配置図)に
•――• で示している。

目　　次

序
例言・凡例
目次・挿図・図版目次・表目次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　調査要項…… 1
第２章　遺跡の環境…… 3
　第１節　遺跡の位置と立地…… 3
　第２節　周辺の地形…… 3
　第３節　歴史的環境…… 5
第３章　発掘調査の概要…… 8
　第１節　遺跡の概観…… 8
　第２節　調査の方法…… 8
　第３節　調査の経過…… 8
　第４節　整理作業の方法と経過…… 9
第４章　調査の記録……11
　第１節　調査区の地形と層位……11
　第２節　検出遺構と出土遺物……14
　第３節　遺構外出土遺物……24
第５章　自然科学分析……30
　第１節　放射性炭素年代測定……30
　第２節　出土炭化材の樹種同定……31
第６章　まとめ……33

図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査範囲と工事計画…… 2
第２図　遺跡の位置…… 3
第３図　遺跡周辺の地形分類図…… 4
第４図　周辺の遺跡…… 6
第５図　グリッド配置図……10
第６図　遺跡基本土層……12
第７図　遺構配置図……13
第８図　竪穴住居跡（SI30）……15

第９図　掘立柱建物跡（SB16）……16
第10図　土坑（１）……18
第11図　土坑（２）……19
第12図　溝跡（SD05・11）……20
第13図　その他（SX45）……21
第14図　遺構内出土遺物（１）……22
第15図　遺構内出土遺物（２）……23
第16図　アスファルト出土状況……25
第17図　遺構外出土遺物（１）……26
第18図　遺構外出土遺物（２）……27
第19図　遺構外出土遺物（３）……28

図　版　目　次

図版１　調査区近景
SI30調査風景
SI30完掘
図版２　SI30須恵器甕出土状況
SB16完掘
SX45須恵器壺出土状況
図版３　SK01完掘
SK04完掘
SK12完掘
SK13断面
SK14断面
SK19完掘
SK20完掘
SK22完掘
図版４　SK32断面
SK33完掘
SK34完掘
SK35完掘
SK38完掘
SK39完掘
SK43完掘
図版５　SD05完掘
SD11完掘
アスファルト出土地
図版６　遺物写真
図版７　分析写真

表　　目　　次

表１　周辺の遺跡一覧表……7
表２　土器・土製品・アスファルト塊観察表……29
表３　石器観察表……29
表４　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果……31
表５　出土炭化材樹種同定結果……32

第１章　はじめに

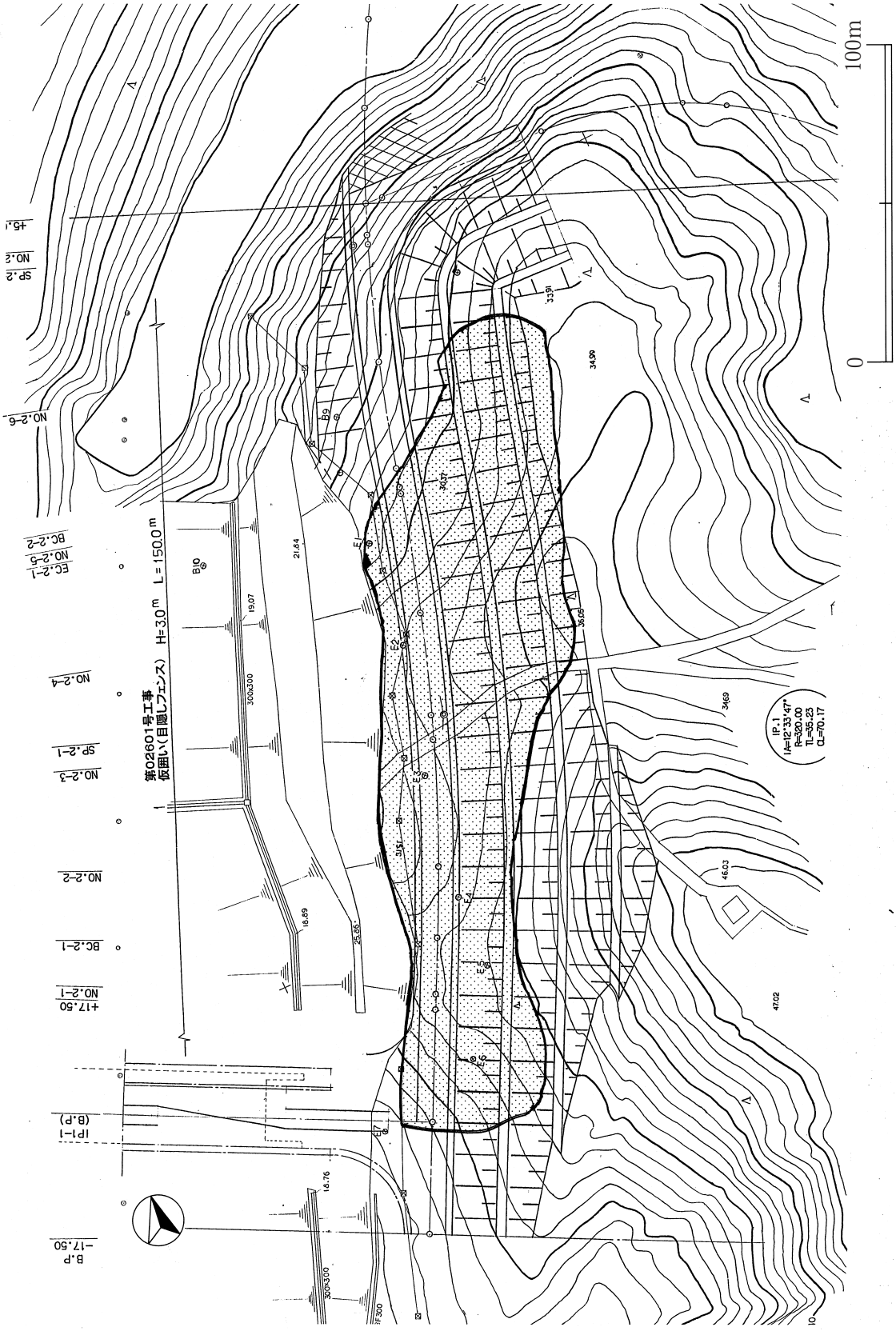
第１節　調査に至る経過

JR大久保駅の南東1.5㎞に位置する龍毛堤は古くからため池として利用されているが、近年老朽化し機能の低下が著しい。そこで龍毛堤の農業用ため池としての機能回復や、生態系の保全、周辺住民への快適空間の提供などを目的とした地域用水環境整備事業が平成９年度より実施されている。この事業は町総合発展計画に基づき、国庫補助を受け、秋田県が主体となって行われているものである。これに先立ち、昭和町教育委員会と秋田県教育庁文化財保護室は、埋蔵文化財確認のため平成13年１月に試掘調査を実施し、隣接する周知の埋蔵文化財包蔵地である元木山根Ⅱ遺跡が事業予定地に広がっていることを確認した。このため、昭和町教育委員会は平成13年７月に、男鹿市教育委員会の協力を得て確認調査を実施し、縄文時代および古代の遺構と遺物の範囲を把握した。

この経緯を踏まえ、昭和町教育委員会と秋田県教育庁文化財保護室は、遺跡の取り扱いについて原因者である秋田総合農林事務所等と協議し、平成14年５月から秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査することとなった。

第２節　調査要項

遺跡名	元木山根Ⅱ遺跡（もときやまねにいせき）
遺跡略号	４ＭＫＹＮⅡ
遺跡所在地	秋田県南秋田郡昭和町大久保字元木山根39－６外
調査期間	平成14年５月27日～平成14年７月19日
調査目的	地域用水環境整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調査面積	3,000㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	磯村　亨（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
	西村　正人（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
	菊地与志人（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主事）
	足利　直哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　非常勤職員）
	堀井　帝仁（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　非常勤職員）
総務担当者	土橋　謙一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　主事）
調査協力機関	秋田県秋田総合農林事務所　昭和町　昭和町教育委員会

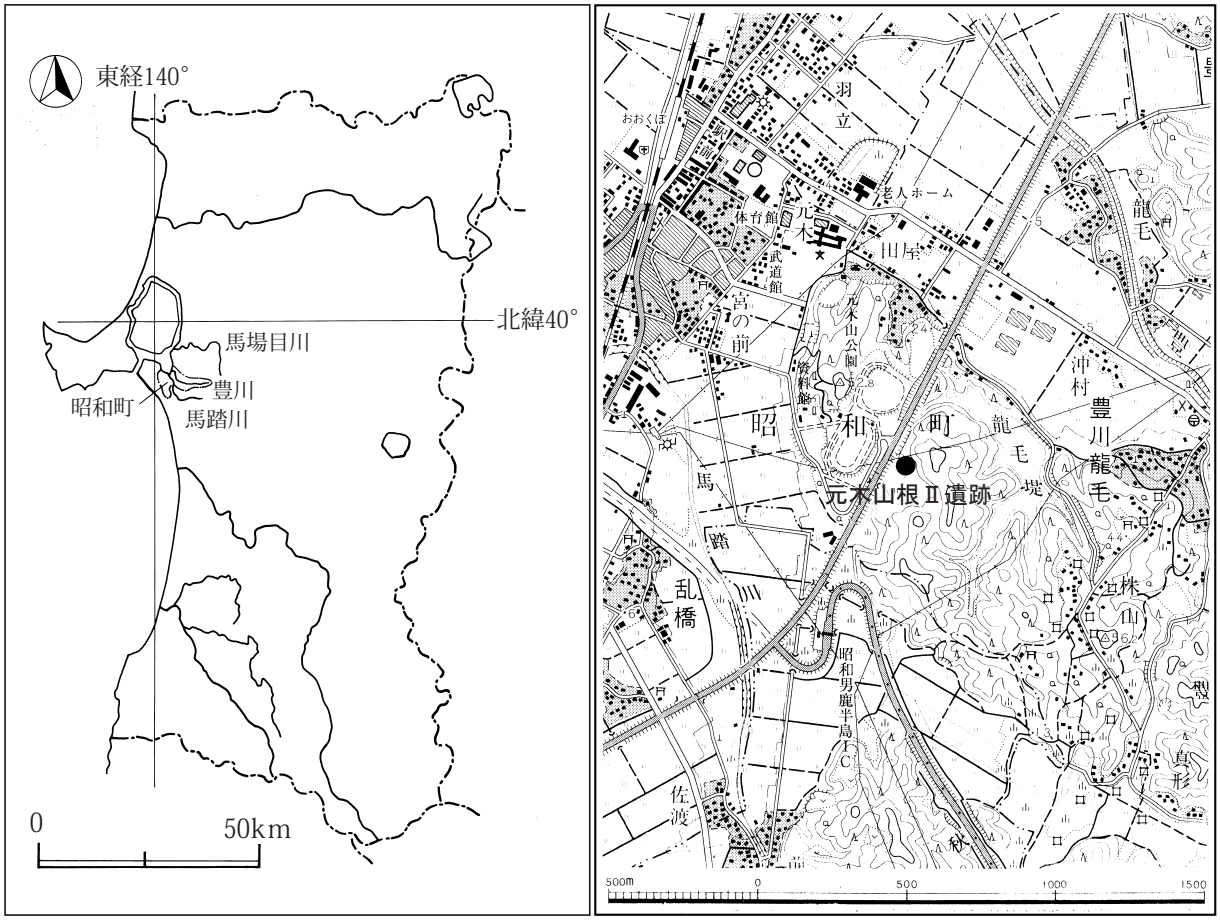


第1図　調査範囲と工事計画

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地（第２図）

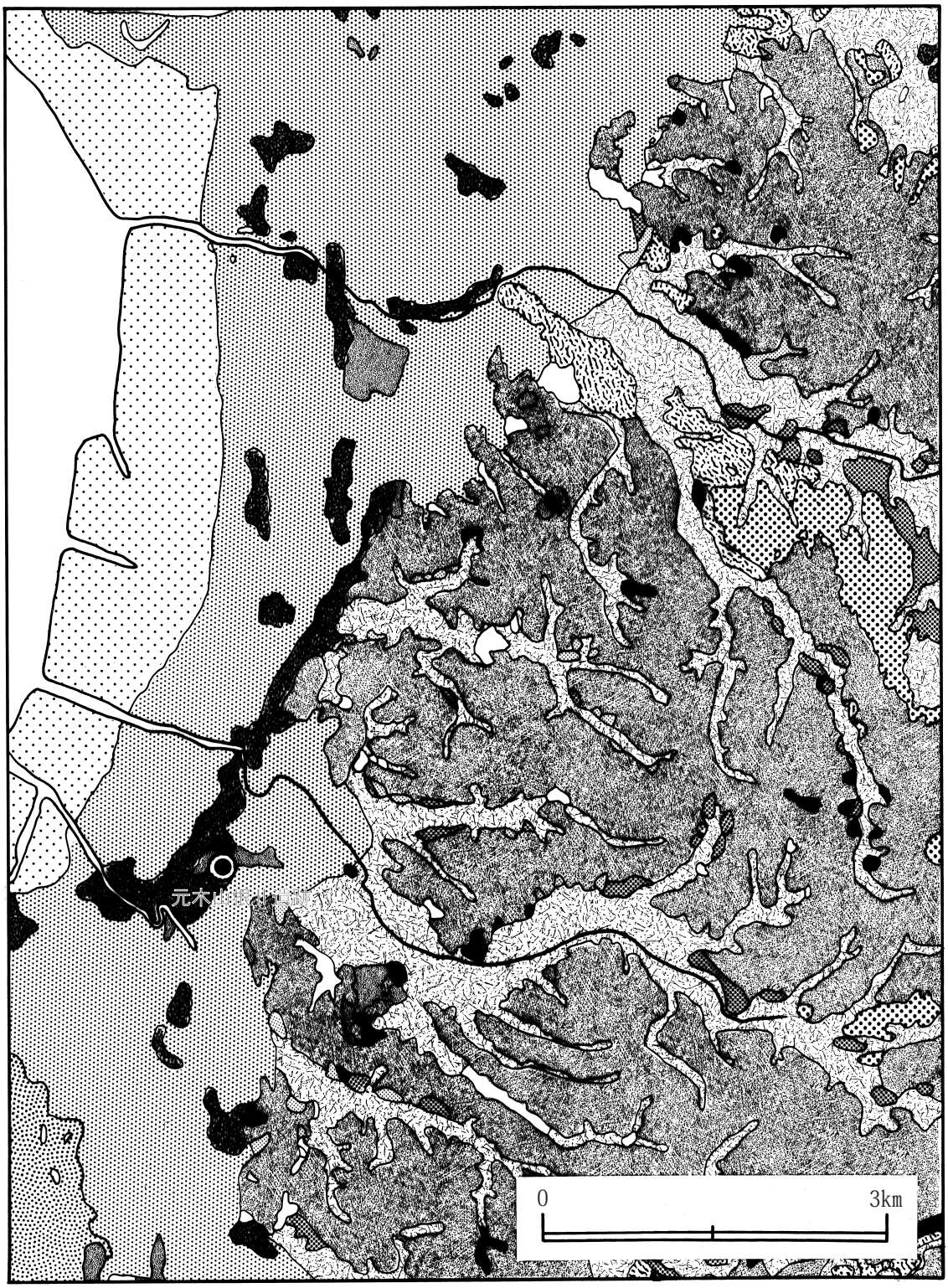
元木山根Ⅱ遺跡は、秋田自動車道昭和男鹿半島インターから北東に0.8㎞、国道７号線を挟んだ元木山公園の東に位置する。遺跡の東には、俎山(721.8m)をはじめとする豊川丘陵が南北に広がる。遺跡は豊川と馬踏川に挟まれ、西に向かって舌状に張り出した丘陵の西端部に位置する。調査区内は緩やかに傾斜しており、標高は28～36mである。



第２図　遺跡の位置

第２節　周辺の地形（第３図）

昭和町の地形は、東部の丘陵地、中央部の沖積地、西部の砂丘地に三分される。東部は出羽山地に属する俎山地の西縁であり、急峻な地形となっている。山地の西には、浸食作用を受けて形成された平坦な丘陵地が広がり、標高を下げて湖岸平野に接している。この丘陵地(豊川丘陵)に谷を刻んで西流する豊川は、その流域に狭長な平地をつくり、同じく出羽山地に源を発し遺跡の南側を流れる馬踏川とともに八郎潟残存湖に注いでいる。



第３図　遺跡周辺の地形分類図

第３節　歴史的環境(第４図、表１)

太平山や馬場目岳の西側に位置する俎山(標高721.8m)から発している馬踏川と豊川は豊川丘陵を浸食して豊かな湖岸平野を形成し、八郎潟残存湖に流れ込む。残存湖周辺には旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く分布する。

旧石器時代の遺跡として平成11年度に調査された元木山根Ⅱ遺跡があり、長さ10.6㎝、幅2.4㎝、厚さ1.1㎝のエンドスクレイパーが出土した。

縄文時代の遺跡では、上松館、大沢、海老漉沼端Ⅰ、海老漉沼端Ⅱ、海老漉沼端Ⅳ、狐森、七ツ森、元木山Ⅰ、元木山Ⅱ、大平、後山、西野、湯の沢Ⅰ、蘭戸下、鳥巻Ⅰ、鳥巻Ⅱ、真形尻、苗代沢、アケビ沢台、松葉沢、鷲尾館、鬼王館がある。特に、蘭戸下遺跡は天然アスファルトの産地として有名であり、明治38年にはアスファルト採掘中にナウマン象等の骨の化石も出土している。また、狐森遺跡から出土した「人面付環状注口土器」は、槻木産の天然アスファルトが付着しており、江戸時代から存在が知られ、現在は国指定重要文化財として県立博物館に保管されている。

古代の遺跡には、前山Ⅰ、前山Ⅱ、海老漉沼端Ⅱ、海老漉沼端Ⅲ、元木山Ⅰ、元木山Ⅱ、西野、大平、湯の沢Ⅰ、湯の沢Ⅱ、深田沢、千刈田、塔田Ⅰ、塔田Ⅱ、塔田Ⅲ、塔田Ⅳ、槻木盛土墳、大宮、鳥巻Ⅰ、カラス沢、草生土沢Ⅰ、正戸尻Ⅰ、正戸尻Ⅱ、寸白沢、高野、苗代沢、アケビ沢台、羽白目、古開がある。平成12・13年度に調査された大平および西野遺跡では、平安時代の竪穴住居跡が検出されていることから当時の集落跡であることが判明している。なお、西野では鍛冶炉１基が検出されており、集落内で鍛冶作業が行われていたことが分かっている。

中世の遺跡には、松館館、岩瀬館、元木館、山田館、極楽館、槻館、真形館、オオサカ館、船橋館、岡井戸館、小玉館、築掛館、鷲尾館、鹿来館、鬼王館がある。

参考文献

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第309集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－大沢遺跡・松館遺跡－』秋田県文化財調査報告書第204集　1991(平成3)年

秋田県教育委員会『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－大平遺跡－』秋田県文化財調査報告書第264集　1996(平成8)年

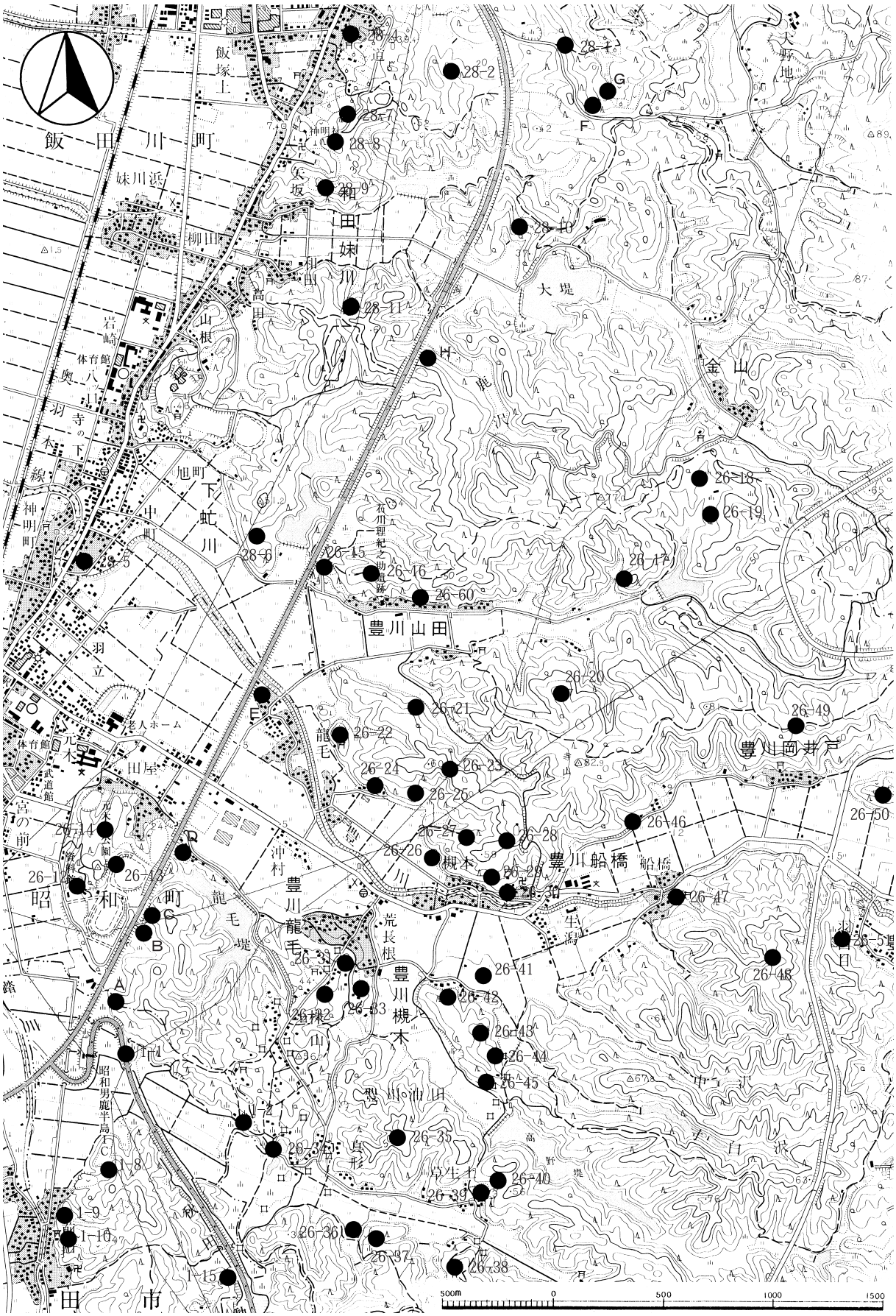
秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』秋田県文化財調査報告書第329集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会『後山遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－』秋田県文化財調査報告書第340集　2001(平成13)年

昭和町『昭和町誌』　1986(昭和61)年

奈良修介・冨樫泰時・鍋倉勝夫「羽白目遺跡調査報告」『秋田考古学　昭和町特集号　25』秋田考古学協会　1965(昭和40)年

秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年


飯田川町
妹川浜
柳田
和田妹川
大堤
金山
岩崎
体育館
奥羽本線
下虻川
旭町
中町
神明町
豊川山田
豊川岡井戸
豊川船橋
豊川龍毛
豊川槻木
荒長根
沖村
龍毛堤
昭和町
昭和男鹿半島
田市
500m
0
500
1000
1500

第４図　周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	種　別	遺構・遺物
秋　田　市				
1-1	松　館	秋田市金足岩瀬字松館大平	館　跡	帯郭
1-2	上松館	秋田市金足岩瀬字上松館	遺物包含地	縄文土器
A	大　平	秋田市金足岩瀬字松館大平28-5外	集落跡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土器埋設遺構、土器焼成遺構、炭焼窯跡、縄文土器、土師器、須恵器
1-8	岩瀬館	秋田市金足岩瀬字佐渡沢	館　跡	
1-9	前山Ⅰ	秋田市金足岩瀬字前山７	遺物包含地	須恵器
1-10	前山Ⅱ	秋田市金足岩瀬字前山	遺物包含地	須恵器
1-15	大　沢	秋田市金足岩瀬字大沢	遺物包含地	縄文土器、赤褐色土器
昭　和　町				
26-12	元木山Ⅰ	昭和町大久保字元木山根50	遺物包含地	縄文土器（後期）、土師器、須恵器
26-13	元木山Ⅱ	昭和町豊川龍毛字開沢	遺物包含地	縄文土器（後期）、土師器、須恵器
26-14	元木館	昭和町豊川龍毛字開沢	館　跡	
B	元木山根Ⅰ	昭和町大久保字元木山根30-1	遺物包含地	縄文土器
C	元木山根Ⅱ	昭和町大久保字元木山根286	集落跡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡溝跡、エンドスクレイパー、縄文土器・石器、アスファルト塊、弥生土器、土師器、須恵器
D	後　山	昭和町豊川龍毛字後山25-3外	集落跡	竪穴住居跡、溝跡、土器埋設遺構、縄文土器、土師器、須恵器
26-15	西　野	昭和町豊川山田字家ノ上117-1外	集落跡	竪穴住居跡、鍛冶炉、縄文土器、土師器、須恵器、石器
26-16	下　台	昭和町豊川山田字家ノ上54	遺物包含地	
26-17	八幡台	昭和町豊川山田字畳沢	寺院跡	五輪塔風空輪部
26-18	湯の沢Ⅰ	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	縄文土器（前期）、須恵器
26-19	湯の沢Ⅱ	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	土師器
26-20	山田館	昭和町豊川山田字滝の沢、砂子沢	館　跡	焼米、茶臼受け皿
26-21	深田沢	昭和町豊川山田字深田沢	遺物包含地	須恵器
26-22	千刈田	昭和町豊川龍毛字千刈田	遺物包含地	石鏃、須恵器
E	毘沙門	昭和町豊川龍毛字上斉藤田12	集落跡	土師器、須恵器、陶磁器
26-23	極楽館	昭和町豊川龍毛字塩辛田1､槻木字塔田、山田字深田沢	館　跡	主郭、帯郭、空堀等
26-24	塩辛田	昭和町豊川龍毛字塩辛田5～8	遺物包含地	石刀
26-25	塔田Ⅰ	昭和町豊川槻木字塔田	遺物包含地	土師器、須恵器
26-26	塔田Ⅱ	昭和町豊川槻木字塔田60	遺物包含地	土師器、須恵器
26-27	塔田Ⅲ	昭和町豊川槻木字塔田12	遺物包含地	須恵器
26-28	槻木盛土墳	昭和町豊川槻木字塔田7	火葬墓	須恵器、蒼石
26-29	塔田Ⅳ	昭和町豊川槻木字塔田1～2	遺物包含地	土師器、須恵器
26-30	大宮	昭和町豊川槻木字大富34	遺物包含地	須恵器
26-31	蘭戸下	昭和町豊川槻木字蘭戸下53の1	遺物包含地	縄文土器
26-32	鳥巻Ⅰ	昭和町豊川槻木字鳥巻	遺物包含地	縄文土器（前期、後期）、須恵器
26-33	鳥巻Ⅱ	昭和町豊川槻木字鳥巻35	遺物包含地	縄文土器（中期、後期）
26-34	真形尻	昭和町豊川槻木字真形尻31	遺物包含地	縄文土器（中期）
26-35	槻館	昭和町豊川槻木字高野～真形沢	館　跡	本郭、腰郭、空堀
26-36	カラス沢	昭和町豊川槻木字カラス沢	遺物包含地	土師器
26-37	真形館	昭和町豊川槻木字カラス沢、草生土沢	館　跡	階段状郭、帯郭
26-38	草生土沢Ⅰ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	土師器
26-39	草生土沢Ⅱ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	石匙
26-40	草生土沢Ⅲ	昭和町豊川槻木字草生土沢18	遺物包含地	五輪塔頂部
26-41	正戸尻Ⅰ	昭和町豊川槻木字正戸尻62	遺物包含地	須恵器
26-42	正戸尻Ⅱ	昭和町豊川槻木字正戸尻	遺物包含地	土師器、須恵器
26-43	オオサカ館	昭和町豊川槻木字正戸尻	館　跡	
26-44	寸白沢	昭和町豊川槻木字寸白沢	遺物包含地	須恵器
26-45	高野	昭和町豊川槻木字高野64	遺物包含地	須恵器
26-46	苗代沢	昭和町豊川岡井戸字中丸111他	遺物包含地	縄文土器（晩期）、土師器、須恵器
26-47	船橋経塚	昭和町豊川船橋字川原崎42	経　塚	盛塚
26-48	船橋館	昭和町豊川船橋字川原崎、堤沢	館　跡	焼米
26-49	アケビ沢台	昭和町豊川山田字市の坪	遺物包含地	縄文土器（晩期）、土師器
26-50	岡井戸館	昭和町豊川岡井戸字前田外	館　跡	帯郭
26-51	羽白目	昭和町豊川上虻川字羽白目	望　烽	烽舎跡、柵跡、平窯跡、瓦、刀子、土師器、須恵器、鉄器
26-60	石川理紀之助遺跡	昭和町山田	史　跡	尚庵、書庫、郷倉
飯　田　川　町				
28-1	鳥木沢	飯田川町飯塚字鳥木沢	遺物包含地	縄文土器（後期、晩期
28-2	古開	飯田川町飯塚字古開250-1.2	遺物包含地	須恵器
F	古開Ⅰ	飯田川町和田妹川字古開	遺物包含地	陶器
G	古開Ⅱ	飯田川町和田妹川字古開241-1外	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器（中期）、石器、土師器、須恵器
28-4	飯塚神明社観音堂	飯田川町飯塚字中山	建　築	入母屋向拝唐破風造柿葺一間社、板碑(貞和３年紀年銘)
28-5	城の内	飯田川町下虻川字城の内84	建物跡	碑一基
28-6	松葉沢	飯田川町下虻川字松葉沢87、88	遺物包含地	縄文土器（中期、晩期）
28-7	小玉館	飯田川町飯塚字水神端134､135	館　跡	帯郭
28-8	築掛館	飯田川町飯塚字僧ヶ沢63-3	館　跡	帯郭、空堀、板碑（南北朝紀年）
28-9	鷲尾館	飯田川町和田妹川字坂の下20	館　跡	帯郭、空堀、縄文土器（後期、晩期）、石鏃
28-10	鹿来館	飯田川町和田妹川字鹿来140	館　跡	帯郭、空堀
28-11	鬼王館	飯田川町和田妹川字大宮沢5	館　跡	帯郭、空堀、段築、焼米、鉄滓、唐津焼、縄文土器（後期・晩期）、石器
H	六ツ鹿沢	飯田川町和田妹川字六ツ鹿沢53	散布地	陶磁器

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

元木山根Ⅱ遺跡は、豊川と馬踏川の浸食を受け西側へ舌状に張り出した豊川丘陵の西端に位置し、その標高は28～36ｍである。調査区は、南北が大きな沢で隔てられ、西側に位置する元木山公園に向かって斜面となっており、北東側にある龍毛堤に向かっては急崖となる南西－北東方向に狭長な3,000㎡の範囲である。

本遺跡は平成11年に日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴って県教育委員会による発掘調査が行われ、旧石器時代のエンドスクレイパーや古代の竪穴住居跡が検出されている。特に古代の竪穴住居跡は今回の調査区の南西側に隣接する箇所で検出しており、遺物もほぼ同時期のものである。また、平成13年には発掘調査に先立って町教育委員会を中心にして確認調査が行われている。

調査区の約250m北には、平成12年に調査を実施した縄文・弥生時代と古代の複合遺跡である後山遺跡が位置する。また豊川を挟み、調査区から約1.75㎞北東の丘陵南端部には、同じく平成12年に調査を実施した西野遺跡が位置する。さらに約1.4㎞南東には、アスファルトの産出地として知られる豊川油田がある。

第２節　調査の方法（第５図）

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区内の道路中心杭(№２－３)から国家座標系第Ⅹ系座標北を求めて南北基準線とし、これに直交する東西基準線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドメッシュを設定した。グリッド杭には、中心杭№２－３をMA50とし、東西方向には東からLJ……LT、MA、MB……のアルファベットと、南北方向には南から北に向かって昇順となる連続した２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、グリッド名とした。方眼杭に囲まれたグリッドの呼称はその南東隅に位置する杭を代表させた。

検出した遺構は、その種類を問わず一連の番号を付し、登録の後、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。

調査の記録は図面と写真によった。遺構・遺物の実測は、グリッド杭を基準とする簡易遣り方測量を採用した。図面は基本的に１/20縮尺とした。ただし調査範囲等は１/100縮尺で行った。写真撮影は35㎜のネガカラーフィルム、リバーサルフィルムを中心に、長期保存のためモノクロフィルムをまじえて行った。

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成14年５月27日から同年７月19日まで実施した。

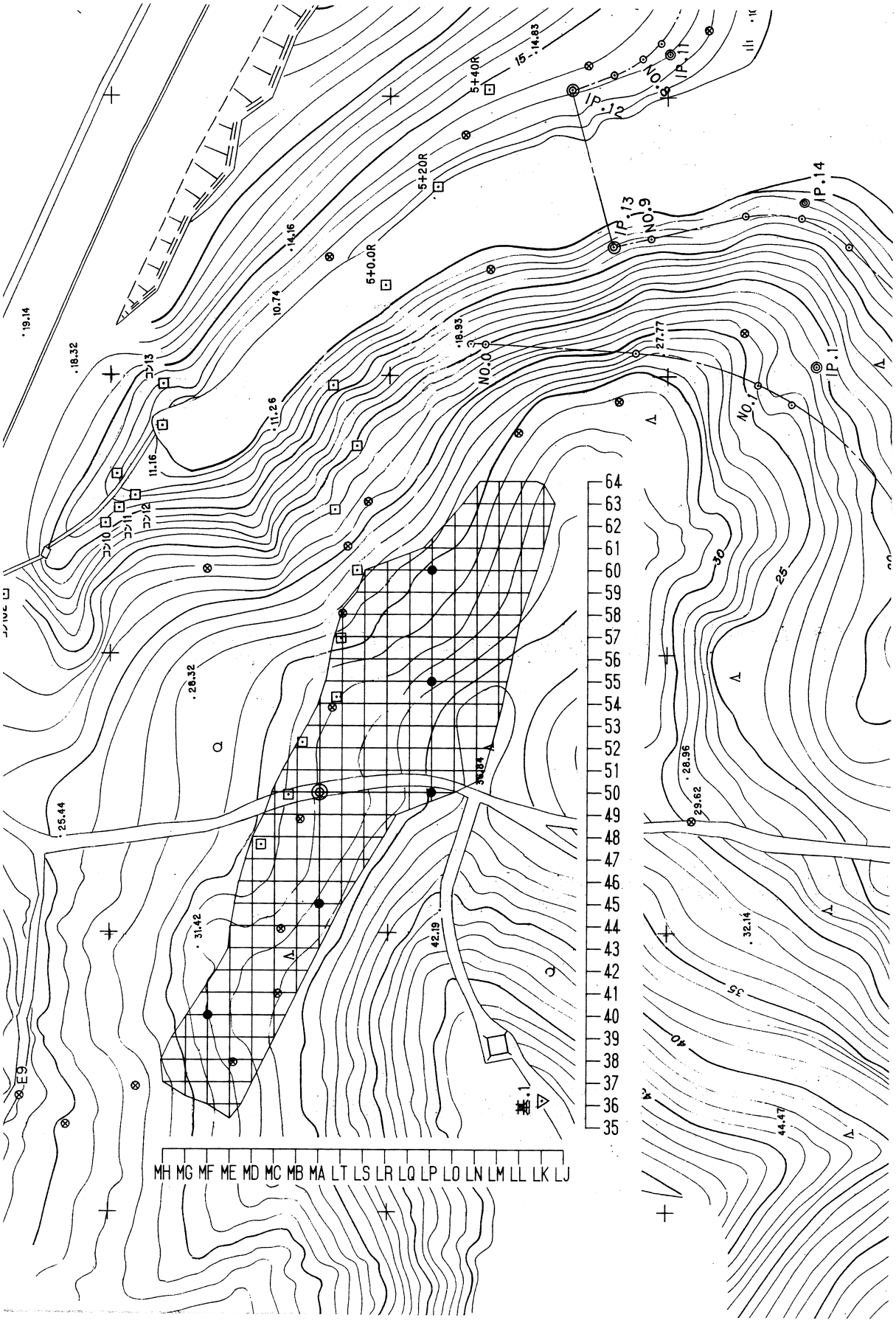
５月27日：南側斜面より調査を開始し、表土除去後の削り下げを行った。南側縁辺部に基本土層ライ

ンを設定する。
５月29日：沢の調査では、MDラインから胎土の真っ黒な縄文土器片がまとまって出土する。
５月30日：中央部北側で東西に延伸する幅50～30㎝の溝を検出しSD11とする。この付近に炭化物粒子を混入する黒褐色土円形プランを検出し、SK12とする。沢の黒褐色土を掘り下げたところ、アスファルト塊が黒褐色土下の砂質土中に散在していることがわかったことから土壌を回収して洗別することにする。
６月３日：南側斜面の精査を終了する。
６月５日：MB41付近で縄文土器が出土する。
６月14日：沢よりアスファルトの小塊に混じって縄文土器が出土する。
６月18日：沢の西側を拡張する。径３～５㎝のアスファルト塊が目立って出土する。
６月19日：Ａ区の精査を終了する。
６月20日：Ａ区の調査終了に伴い農林事務所、業者立ち会いのもと同区の引き渡しを行う。
６月28日：沢の土壌回収を完了する。
７月１日：南側調査区で土師器と須恵器が出土する。
７月３日：南側の掘り下げを進めたところ焼土塊集中部を確認する。
７月５日：ＭＢ50グリッドから弥生土器が出土する。南側遺物集中範囲が竪穴住居跡であることを確認し、SI30とする。
７月９日：SI30の床面付近に焼土範囲を数箇所確認。遺物ドットを落としながら取り上げを行う。北側調査区で焼土と認識していた範囲は地層中に含まれる自然層位であることがわかり、遺構ではないことを確認する。
７月15日～19日：SI30の壁を検出し、実測作業を行う。
７月19日：遺構精査、地形測量を終えて発掘調査を終了する。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、調査終了後秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で行った。出土した遺物の洗浄・注記・分類・接合を開始し、この工程が終了した遺物から分類・実測・採拓・トレースなどの作業を行った。遺構図面の浄書は、現場で記録した実測図(原図)を基にして第２原図を作成した。第２原図の縮尺は基本的に1／20とした。

報告書の作成にあたって、縄文時代の遺物は遺構外でしか検出されず、遺構の時期が古代に限定されるため、遺構の掲載順序を検討した。その結果、まず分類を優先して、次に遺構番号の小さい順に配列することとした。遺物については、遺構内出土遺物を先に、遺構外出土遺物を後に掲載した。


MH MG MF ME MD MC MB MA LT LS LR LQ LP LO LN LM LL LK LJ
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
IP.11
IP.12
IP.13
IP.14
IP.1
NO.9
NO.0
NO.1
5+40R
5+20R
5+0.0R
14.83
14.16
10.74
18.93
27.77
19.14
18.32
11.26
11.16
28.32
25.44
31.42
42.19
28.96
29.62
32.14
44.47
E9
基.1

第５図　グリッド配置図

第４章　調査の記録

第１節　調査区の地形と層位(第６図・図版１)

調査区は豊川丘陵の西端に位置し、南北を大きな沢で隔てられ、東から西に向かって緩やかな傾斜地となっている。

＜基本土層①＞

第Ⅰ層　　表土層。暗褐色(10ＹＲ3/4)土層。しまり、粘性ともなし。混入物少しあり。砂～シルト。

第Ⅱ層　　暗褐色(10ＹＲ3/4)土層。しまり、粘性強い。地山・炭化物粒子が全体的に混入している。砂～シルト。

第Ⅲ層　　黒褐色(10ＹＲ2/3)土層。しまり、粘性強い。地山ブロック混入。砂～シルト。

第Ⅳ層　　黄褐色(10ＹＲ5/6)土層。しまり強く、粘性弱い。微小な礫を多く含む。地山土が流れ込んだものとみられる。

第６図は、調査区南端(暫定掘削境界杭№MR-1～方向杭MG37+2.50m)部の土層堆積状況である。

Ⅰ層は表土であり、調査区内にはほとんど残っていない。Ⅱ層中に遺物が見られるが、斜面に流れ込んだものと考えられ、明確な包含層としてとらえることはできない。

＜基本土層②＞

第Ⅰ層・第Ⅲ層　　基本土層①に対応する。

第Ⅴ層　　褐色(10ＹＲ4/4)土層。しまり、粘性あり。地山漸移層。粘土～シルト。基本土層①よりも地山土が明瞭である。沢下では形成されない漸移層が存在する。

＜基本土層③＞

砕石は山道に入れたもので、その下の盛土層は山道造成時のものである。SD05よりも新しい堆積である。

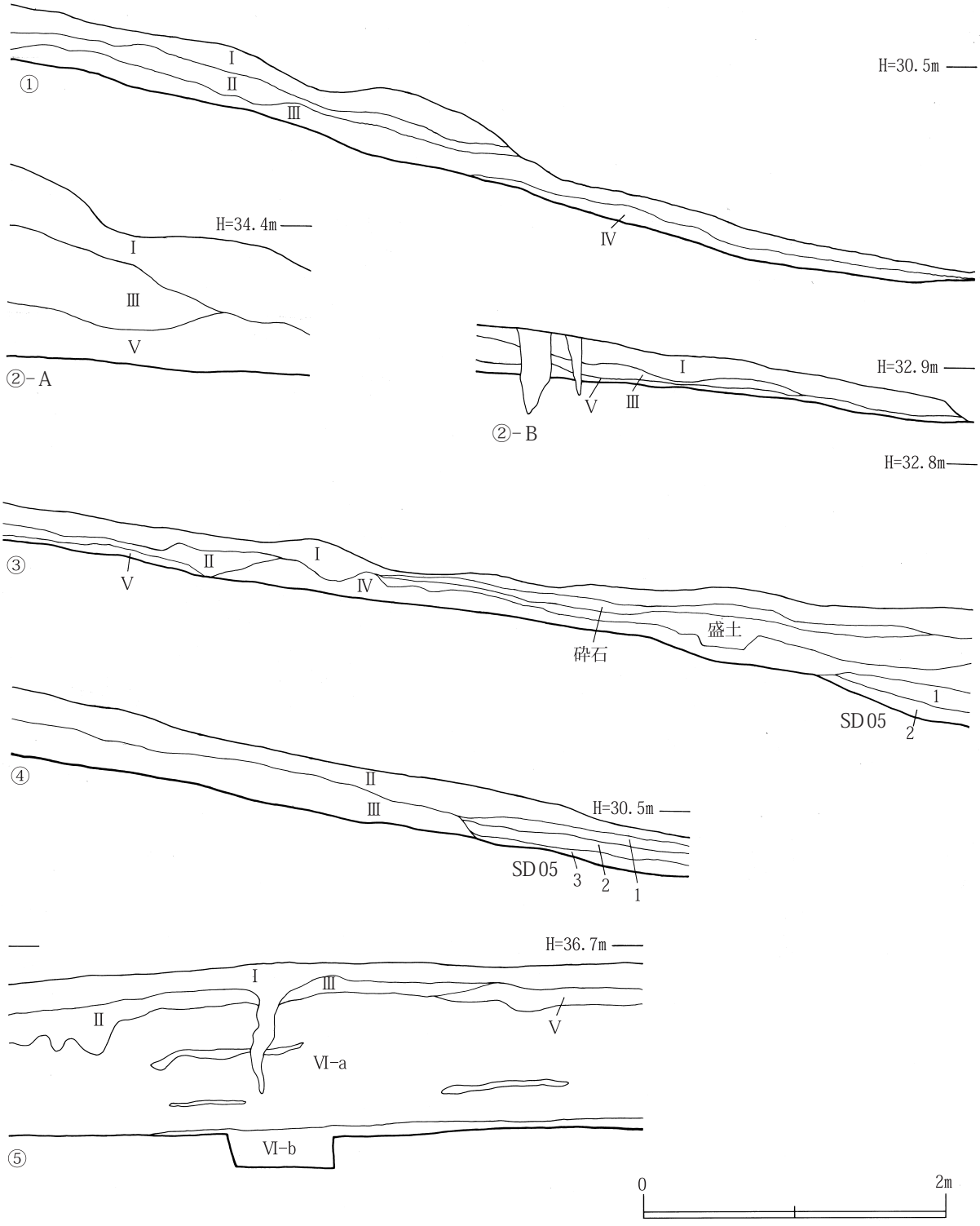
＜基本土層④＞

調査区南側の土層でSD11よりも新しい堆積である。

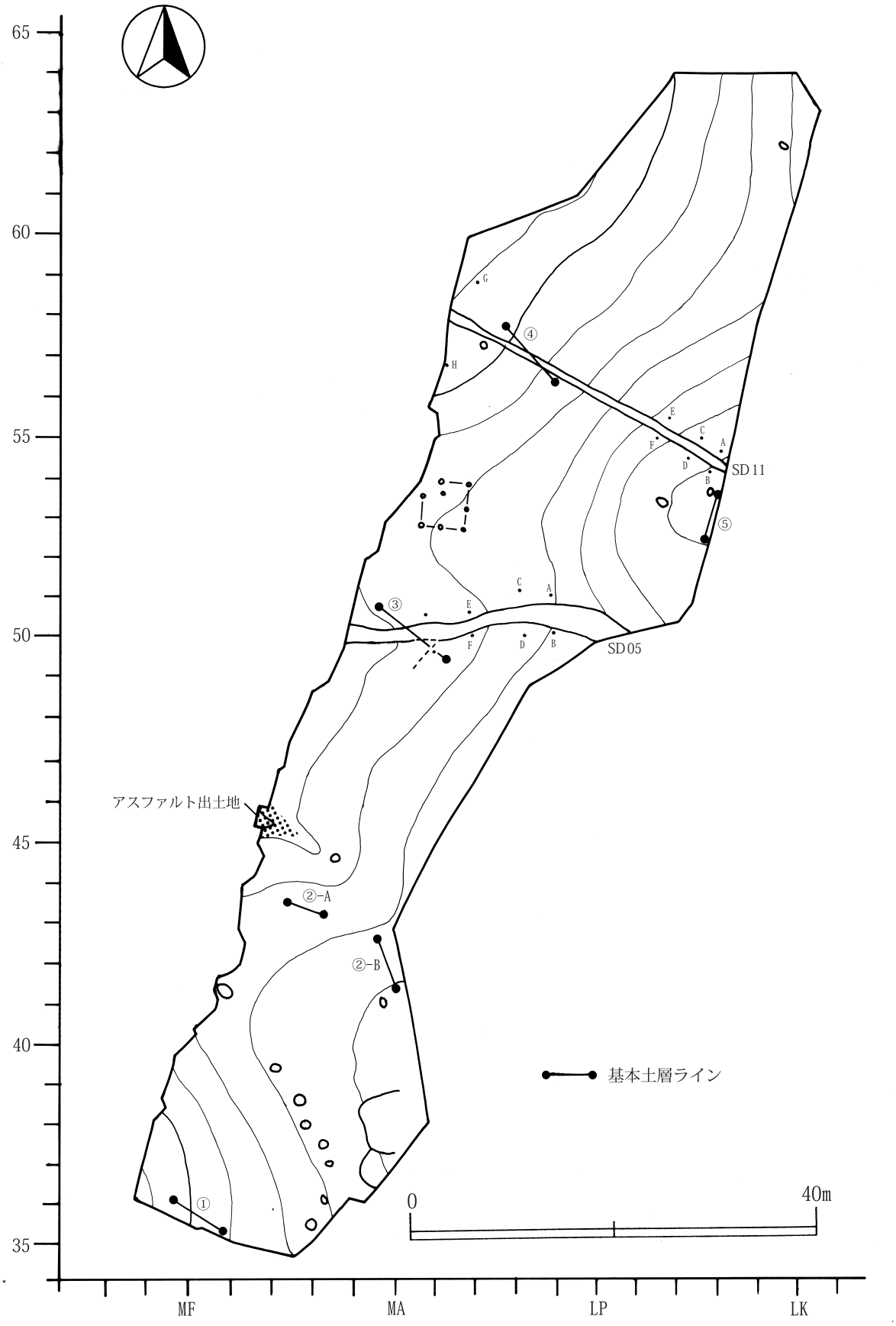
基本土層①～④は傾斜がやや急であり、土壌の流れ込みが多く見られ、水平堆積が見られる所はごくわずかである。また、③、④地点では、遺構が埋まりきった後で堆積したことがわかる。調査区に残る土層は、検出した遺構の時期が平安時代であることから、古代以降堆積したと考えられる。第Ⅴ層とした地山漸移層が残存する付近では縄文時代の遺物が比較的多く出土している。なお、地山漸移層は遺構付近や斜面では部分的に見られる程度である。

＜基本土層⑤＞

調査区で最も標高が高く、比較的平坦な部分を４m四方で深さ約1m掘り下げた箇所の土層である。今年度の調査区の南西側にある平成11年度調査区では、当地点よりも約8m標高の低い地点から旧石器代のエンドスクレイパーが出土していることやこの周辺から頁岩の剥片が出土していたことから、約５cmずつ掘り下げて遺物の有無を確認した。６分層したが、いずれの層からも遺物が出土しなかったことから今回の調査区内には旧石器時代の文化層は存在しないことを確認した。


①
H=30.5m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
H=34.4m
Ⅰ
Ⅲ
Ⅴ
②-A
②-B
H=32.9m
Ⅰ
Ⅴ
Ⅲ
H=32.8m
③
Ⅴ
Ⅱ
Ⅰ
Ⅳ
盛土
砕石
SD05
1
2
④
Ⅱ
Ⅲ
H=30.5m
SD05
3
2
1
H=36.7m
Ⅰ
Ⅲ
Ⅱ
Ⅴ
Ⅵ-a
Ⅵ-b
⑤
0
2m

第６図　遺跡基本土層


65
60
55
50
45
40
35
MF
MA
LP
LK
SD11
SD05
アスファルト出土地
①
②-A
②-B
③
④
⑤
A
B
C
D
E
F
G
H
基本土層ライン
0
40m

第７図　遺構配置図

第２節　検出遺構と出土遺物

本調査で検出した遺構は、竪穴住居跡１軒・掘立柱建物跡１棟・土坑15基・溝跡２条・性格不明遺構１基の計20遺構で、埋土の堆積状況や出土遺物などから古代と考えられる。

（１）竪穴住居跡

SI 30竪穴住居跡（第８・14図・表２・図版１、２、７）

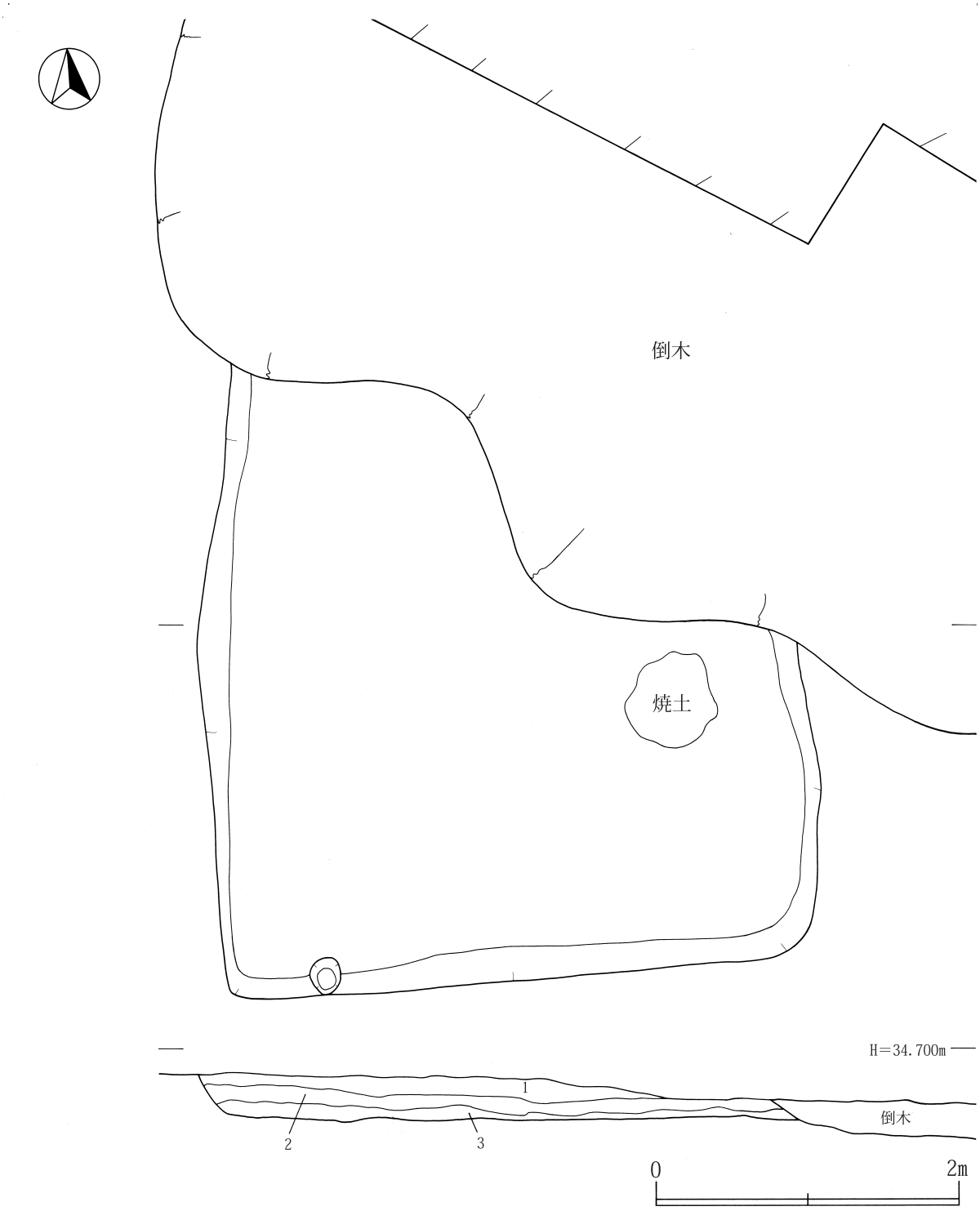
MC 38・39、MD 38・39グリッドの地山面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。一辺3.91～4.02mの方形を呈し、確認面から床面までの深さは0.3m前後である。埋土は３層で自然堆積を呈する。壁はやや開き気味に立ち上がり、北側の全てと東西側の一部は倒木により大きく失われていた。床面はほぼ平坦で、西側に径0.62mで焼土化した範囲があり、南東隅には径0.2m、深さ0.15mの柱穴がある。カマドは、煙道や袖が見つからなかったことから、明確には確認できなかった。しかし、床面が焼土化した付近にあったことが考えられ、倒木により失われた可能性が高い。遺物は土師器、須恵器が318点出土している。焼土周辺および倒木付近で多く分布しており、倒木の埋土に含まれるものも認められた。大半は小破片であり図上で復元可能なもののみを図化して掲載している。その内訳は土師器甕３、須恵器甕２、坏３、蓋２である。以下に各遺物の詳細を記す。

１・２は土師器甕口縁部である。体部から頸部にかけて「く」の字状に摘み出されている。２は内面に煤状炭化物が付着している。３は土師器甕底部で、体部への立ち上がりがやや鋭角なものである。４・５は須恵器甕口縁部である。４は口唇部が稜をもって膨らむものである。５は体部から頸部にかけて「く」の字状に屈曲し、口唇部は平坦である。６～８は須恵器坏である。６は体部下半がやや膨らみ、口縁部が直線的で、口唇部が先細りする器形である。内面特に底部付近には焼き膨れが多く見られる。７は器面色が赤褐色を呈し、底径が広く器高が低い器形で底面には焼き損じのヒビが見られる。６・８の底部には高台が付いており、いずれも成形後付けられたものである。断面形は三角形（６）と四角形（８）で、６のそれは短く外に踏ん張る形状で接地面には沈線状の窪みをもつ。９・10は坏蓋である。天井部が低く平坦な９と、高く丸味をもつ10がある。いずれも端部は鋭く内傾し、つまみ部は欠損している。10は高さが一定ではなく歪んでいる。坏・坏蓋は全体がロクロ成形、甕は口縁部がロクロ成形で以下にはタタキ目が施されている。16は紡錘車で、大きさは径5.2㎝、厚さは一定ではないがおよそ1.3㎝である。中央部には径10㎜の穿孔が見られる。

（２）掘立柱建物跡

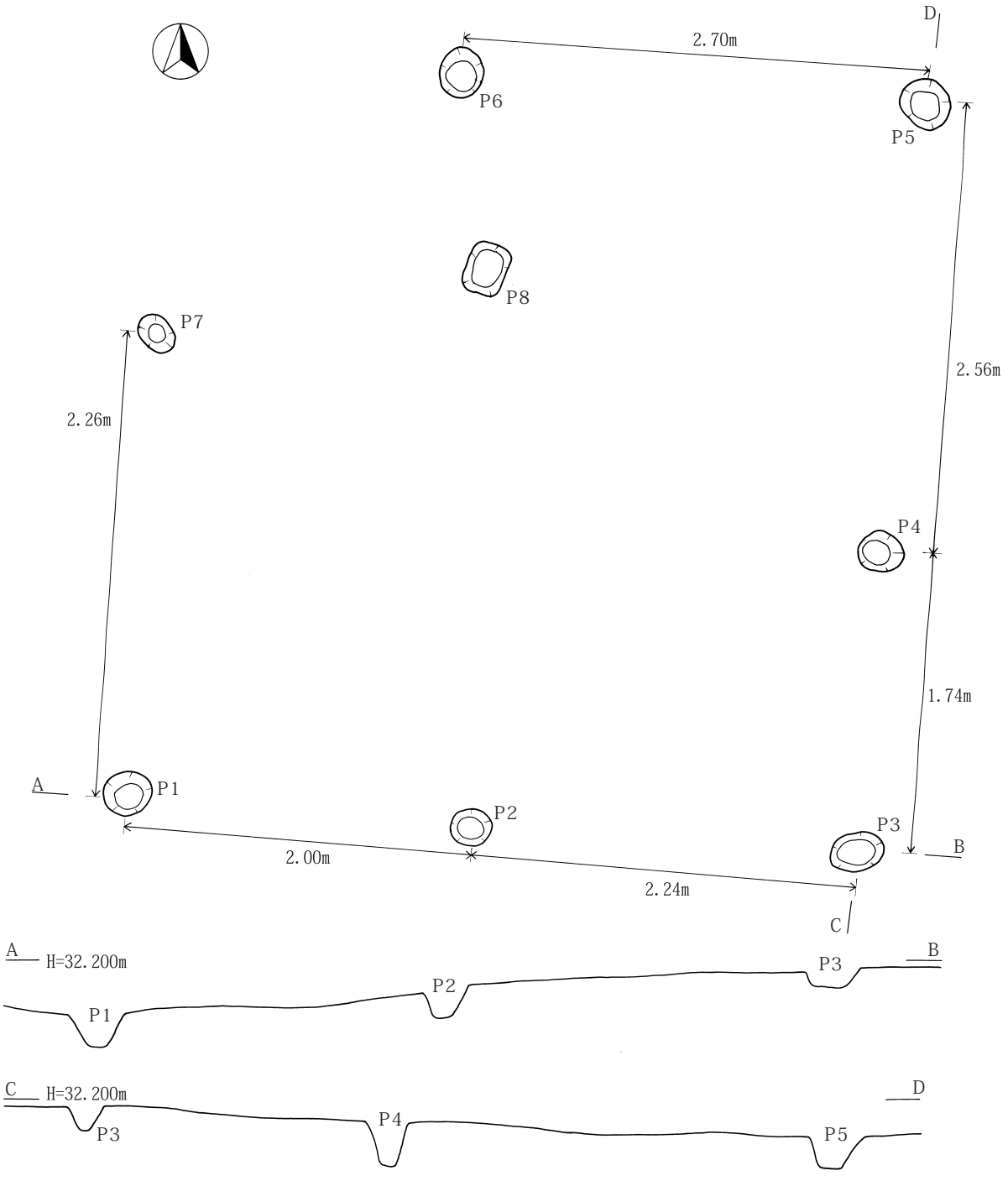
SB 16掘立柱建物跡（第９図・図版２）

LS 52～53、LT 52～53グリッドの地山面で確認された。SK 14土坑と重複しており、約70m程南側にはSI 30が位置する。８個の柱穴が一見不規則に並んでいるが、P１・P２・P３とP３・P４・P５をそれぞれ直線でつなぐと、各柱穴はほぼ方形に配置している。桁行は4.30m、梁行は4.24mである。またＰ３～Ｐ５を結ぶ主軸方向はＮ－５°－Ｅに伸びている。柱穴は直径0.22～0.30m、深さ0.11～0.27mの円形・略円形・楕円形・隅丸方形である。確認面での埋土は黒褐色と暗褐色の土が主体で、柱痕跡は認められなかった。出土遺物はない。



1．褐色土(10YR 4/4)・地山土混入
2．暗褐色土(10YR 3/3)・炭化物、地山土、焼土混入　遺物多い
3．にぶい黄褐色土(10YR 4/3)・地山土混入

第８図　竪穴住居跡(ＳＩ30)



柱穴番号	平面形	土　色	直 径(m)	深 さ(m)
Ｐ１	略円形	暗褐色	0.26×0.24	0.2
Ｐ２	円　形	暗褐色	0.22	0.16
Ｐ３	楕円形	黒褐色	0.3×0.22	0.14
Ｐ４	略円形	黒褐色	0.26×0.22	0.24
Ｐ５	略円形	暗褐色	0.3×0.26	0.18
Ｐ６	略円形	暗褐色	0.3×0.24	0.2
Ｐ７	楕円形	褐　色	0.24×0.18	0.27
Ｐ８	隅丸方形	黒褐色	0.3×0.22	0.11

第９図　掘立柱建物跡（ＳＢ16）

（３）土坑

SK01土坑(第10図、図版３)

MD41・ME41グリッドの地山面で確認された。直径1.20mの略円形を呈する。本来の土坑は円形をなしており、北西方向に突出した部分は倒木痕である。埋土は３層に分層した。深さは0.40mである。底面は南東側に傾斜しているが、ほぼ平坦である。

SK04土坑(第10図、図版３)

MC39・MD39グリッドの地山面で確認された。直径1.10mの略円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.22mで、底面は南西側に傾斜しているが、ほぼ平坦である。

SK12土坑(第10図、図版３)

LR57グリッドの地山面で確認された。直径0.66mの略円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.10mで、底面はほぼ平坦である。

SK13土坑(第10図、図版３)

MC38グリッドの地山面で確認された。直径1.20mの円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.16mで、底面はほぼ平坦である。

SK14土坑(第10図、図版３)

LT53グリッドの地山面で確認された。SB16掘立柱建物跡と重複している。直径0.72mの略円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.24mで、底面はほぼ平坦である。

SK19土坑(第10図、図版３)

MB44グリッドの地山面で確認された。長軸(北東－南西)0.90m、短軸(北西－南東)0.66mの楕円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.20mで、底面はほぼ平坦である。

SK20土坑(第10図、図版３)

LK61～62グリッドの地山面で確認された。直径0.74mの略円形を呈する。埋土は２層に分層した。深さは0.10mで、底面は木の根で撹乱されている部分を除いては、ほぼ平坦である。

SK22土坑(第10図、図版３)

LM53グリッドの地山面で確認された。直径0.72mの略円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.18mで、底面はほぼ平坦である。

SK32土坑(第10図、図版４)

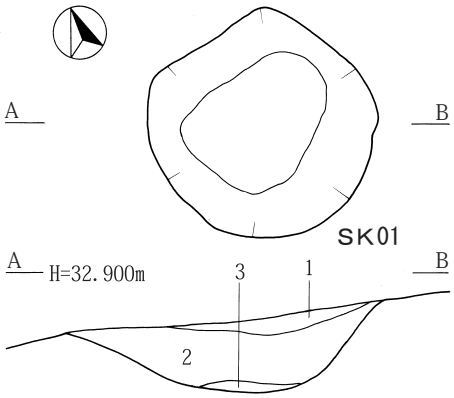
MC35グリッドの地山面で確認された。直径0.82mの略円形を呈する。埋土は２層に分層した。深さは0.30mで、底面はほぼ平坦である。

SK33土坑(第10図、図版４)

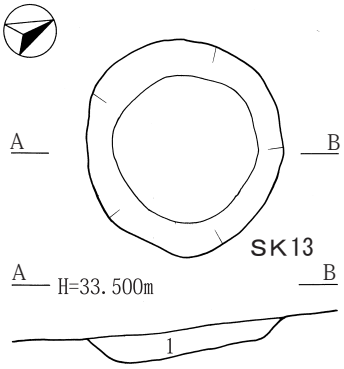
MB36グリッドの地山面で確認された。長軸(北－南)1.00m、短軸(東－西)0.72mの楕円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.32mで、底面はほぼ平坦である。

SK34土坑(第10図、図版４)

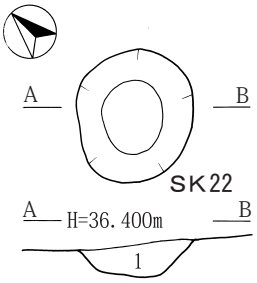
MB37グリッドの地山面で確認された。直径0.88mの半円形を呈する。埋土は２層に分層した。深さは0.32mで、底面はほぼ平坦である。



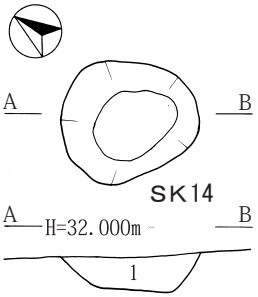
1．褐色土　（10YR 4／4）・地山土混入
2．黄褐色土（10YR 5／4）・地山土混入
3．褐色土　（10YR 4／4）・地山土混入



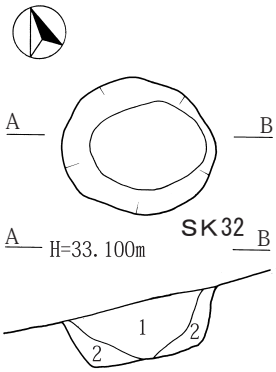
1．暗褐色土（10YR 3／4）
・地山土混入



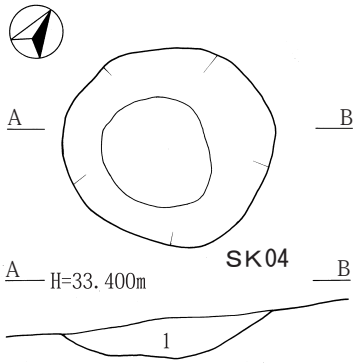
1．暗褐色土（10YR 3／4）



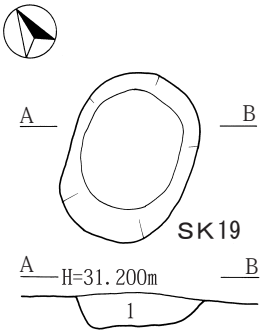
1．褐色土（10YR 4／4）
・地山土および炭化物混入



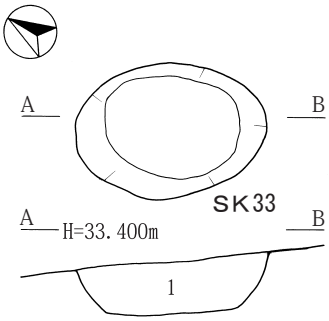
1．褐色土（10YR 4／4）
2．褐色土（10YR 4／6）
・地山土混入



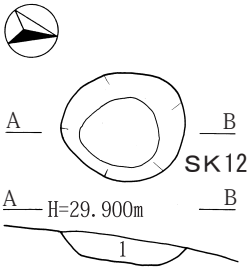
1．暗褐色土（10YR 3／4）・地山土混入



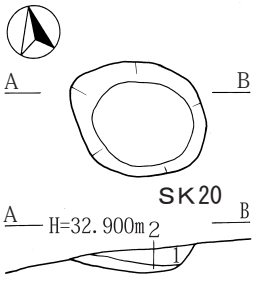
1．黒褐色土（10YR 3／1）
・炭化物混入



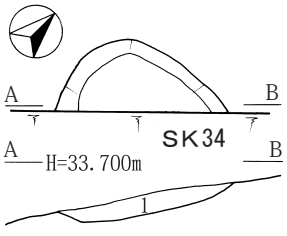
1．褐色土（10YR 4／4）
・地山土混入



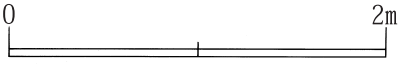
1．黒色土　（10YR 2／1）



1．黒色土　（10YR 2／1）
・炭化物混入
2．暗褐色土（10YR 3／3）
・地山土混入



1．褐色土　（10YR 4／4）
・地山土混入
2．暗褐色土（10YR 3／4）



第10図　土坑(1)

SK35土坑(第11図、図版４)

MB37グリッド地山面で確認された。長軸(東－西)0.84m、短軸(北－南)0.54mの楕円形を呈する。埋土は２層に分層した。深さは0.28mで、底面はほぼ平坦である。

SK38土坑(第11図、図版４)

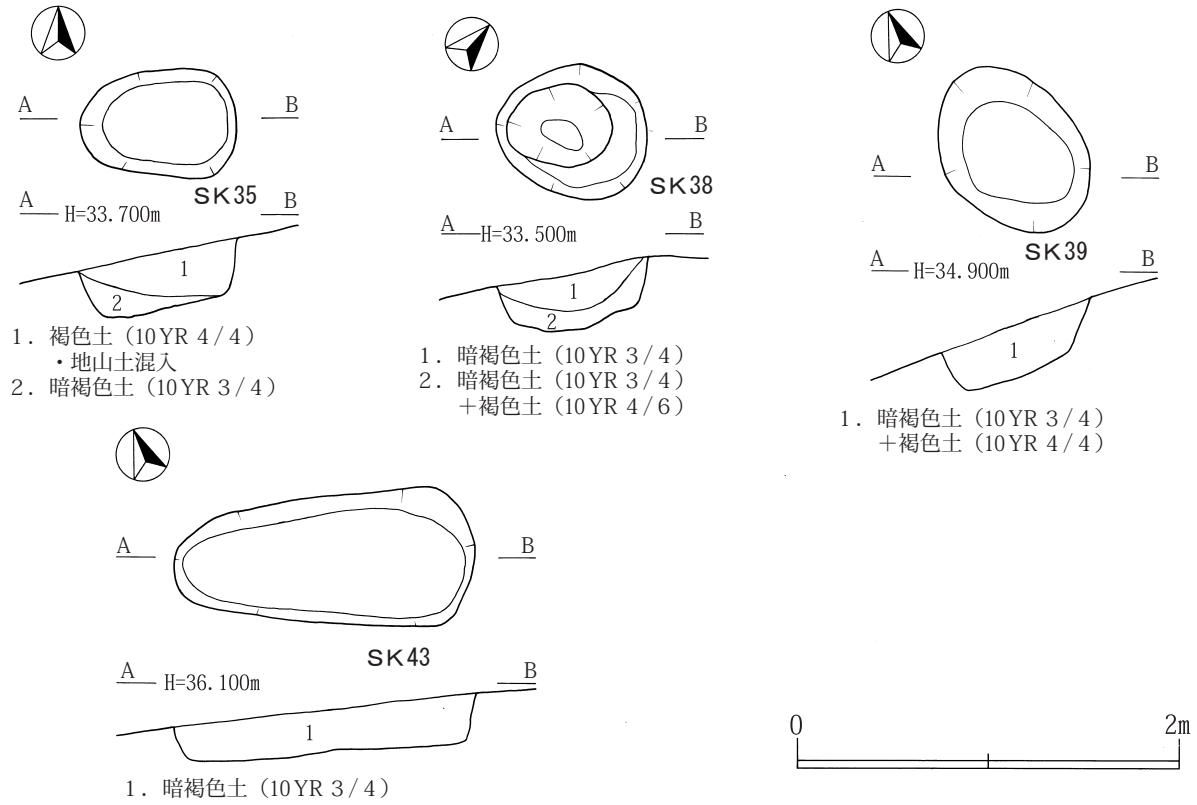
MC38グリッド地山面で確認された。直径0.80mの略円形を呈する。埋土は木の根で撹乱されている部分を除いて、２層に分層した。深さは0.26mで、底面はほぼ平坦である。

SK39土坑(第11図、図版４)

MA41グリッド地山面で確認された。長軸(北西－南東)1.00m、短軸(北東－南西)0.70mの楕円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.28mで、底面は南西側に傾斜しているが、全体としては平坦である。

SK43土坑(第11図、図版４)

LN53グリッドの地山面で確認された。長軸(北西－南東)1.60m、短軸(北東－南西)0.56mの楕円形を呈する。埋土は１層のみ。深さは0.26mで、底面はほぼ平坦である。



第11図　土坑(2)

（４）溝跡

SD05溝跡(第７・12図、表２、図版５)

LO～LR50・LS49～50・LT49～50・MA49～50グリッドの地山面で確認された。東－西方向に長さ(直線距離)25.60ｍで、幅1.04～2.80ｍ、深さは0.28～0.56ｍである。縄文土器と土師器、須恵器が出土した。須恵器は底面から出土したもので内外面にタタキ目が施される甕の体部破片である。

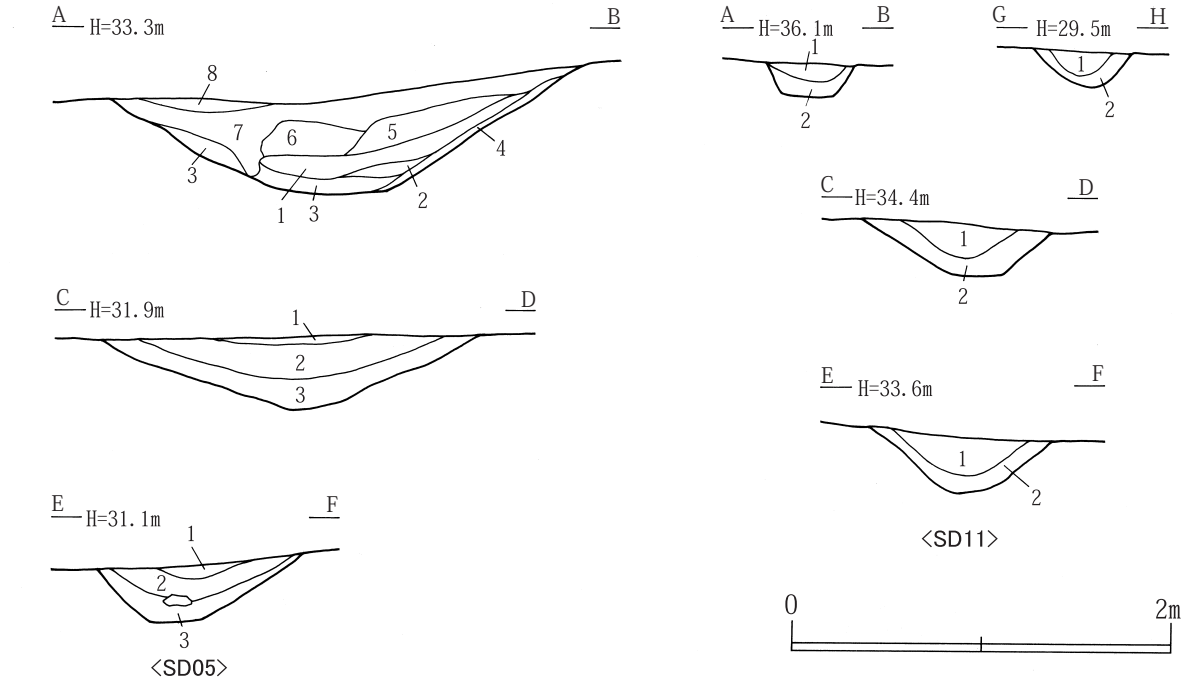
SD11溝跡(第７・12図、図版５)

LL～LM54・LN54～55・LO55・LP56・LQ56～57・LR57・LS57～58グリッドの地山面で確認された。北西－南東方向に長さ(直線距離)31.20ｍで、途中LO55とLP56グリッド間に2.80ｍの断絶がある。幅0.40～1.04ｍ、深さは0.16～0.32ｍである。出土遺物はない。

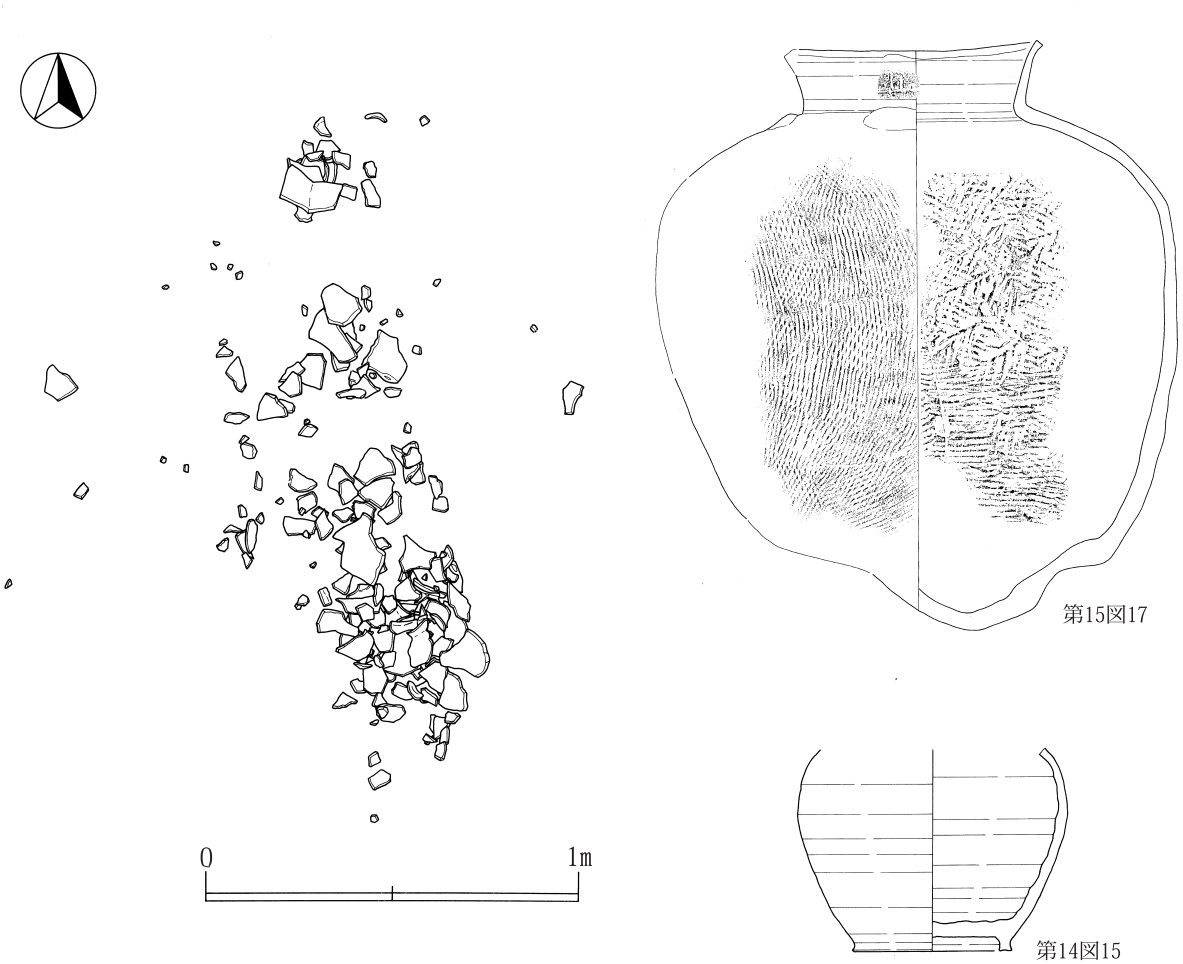
（５）その他

SX45(第13～15図、表２、図版７)

MA36グリッドの地山面で検出された。SI30の南東側に隣接しており、遺物が集中して出土する範囲を遺構としたものである。須恵器大型甕１個体、壺１個体が一箇所にまとまって出土した。甕は口縁から底部までほぼ完形に復元することができたものである。全体的に歪みや焼き膨れが多く見られ、特に口縁部と底部でそれが著しい。底部は丸く、体部はゆるやかに外反しながら立ち上がる。肩部から口縁部へは内傾しながら至り、口縁部は外傾している。底部には窯壁片が付着している。口縁外面には「九」のヘラ書きが見られる。器面には内外面に板状工具によるタタキ目が施され、外面の半分には自然釉が認められる。



第12図　溝跡(SD05・11)



第13図　その他(ＳＸ45)

参考文献

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第309集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＩ－竹原窯跡－』秋田県文化財調査報告書第209集　1991(平成3)年

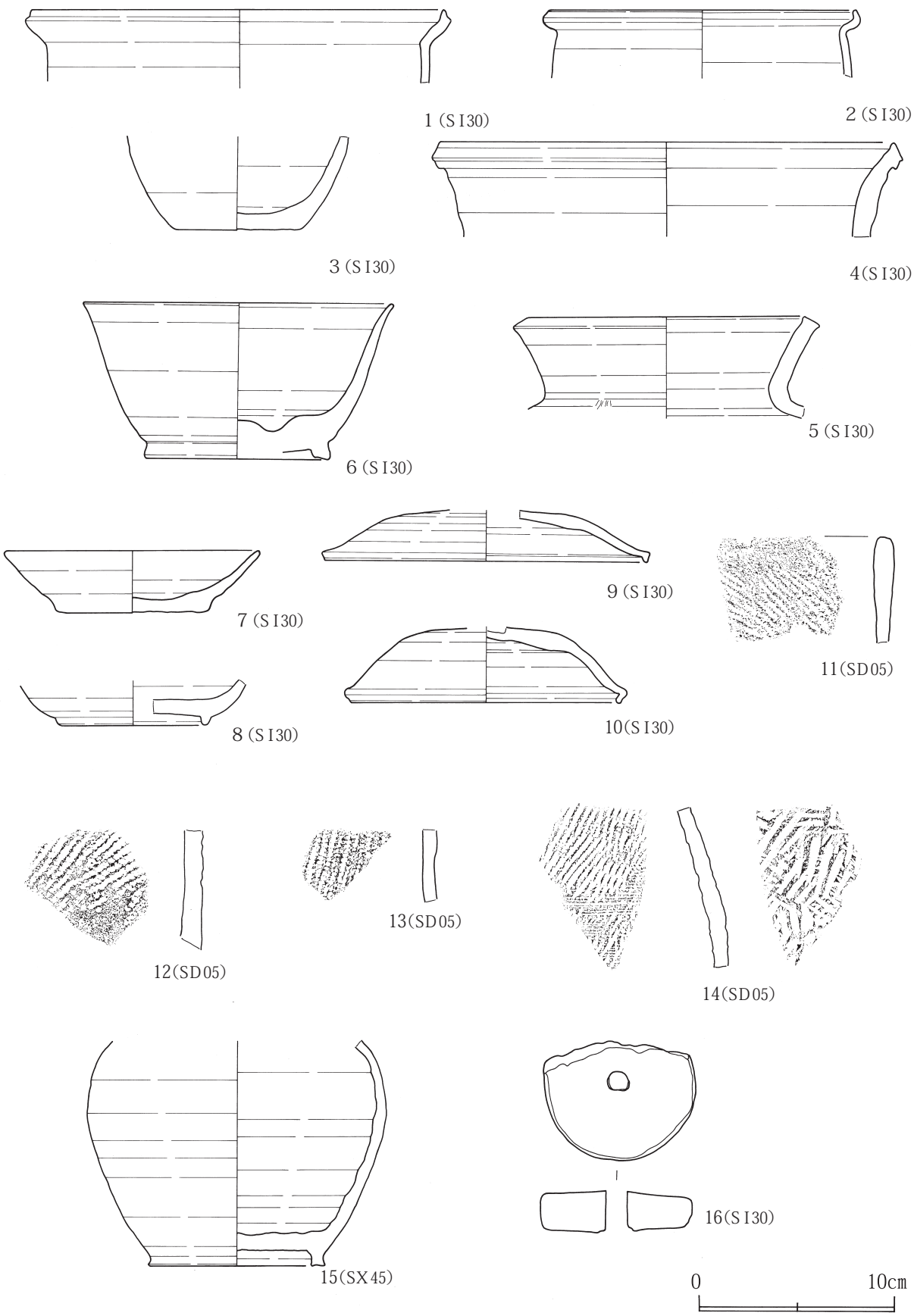
秋田県教育委員会『古館堤頭Ⅱ遺跡－一般県道森岳鹿渡線地方道路踏切除去工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第338集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会『小林遺跡Ⅰ　縄文時代編－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅣ－』秋田県文化財調査報告書第344集　2002(平成14)年

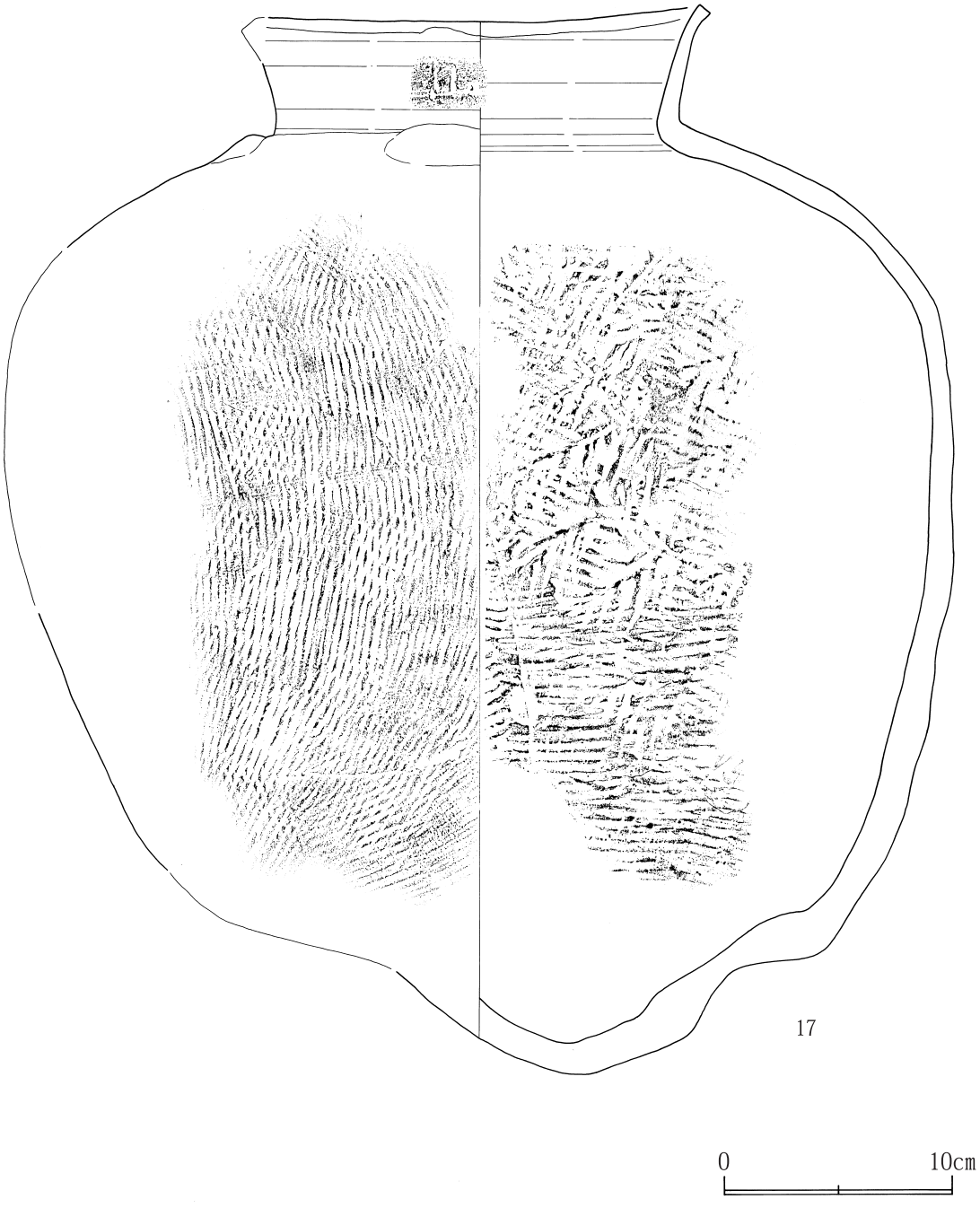
秋田県教育委員会『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－大平遺跡－』秋田県文化財調査報告書第264集　1996(平成8)年

秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－』秋田県文化財調査報告書第329集　2001(平成13)年

昭和町教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡－水環境整備事業「昭和地区」に係る埋蔵文化財確認調査報告書－』昭和町文化財調査報告書第2集　2002(平成14)年



第14図　遺構内出土遺物（1）



第15図　遺構内出土遺物(2)

第３節　遺構外出土遺物

１　土器(第17図)

遺構外から出土した土器は、縄文時代中期、後期、弥生時代、平安時代のものであるが、調査区全体が斜面となっており、層位的に確実に把握できるものではなかった。また、各時期とも遺物量が少なく、器形を復元できるような資料がなかったことから各破片の内外面の特徴を記載することとした。

18～26は縄文時代の土器である。18は半截竹管状工具による刺突文が施され、その上下に粘土紐が貼り付けられている。19～21は同一個体であり沈線により無文帯を区画したものである。23・24はRL原体の斜位回転による縦位縄文が施されている。25は外面に横方向のナデが施されている。27は波状口縁の内外面に平行沈線が施されている。28・29は平行沈線間に鋸歯状沈線が施され無文帯を区画している。30～33は底部で、体部下半にはLR斜縄文が施されている。34は土師質土器で高台が削り出しで作られている。

２　アスファルト(第17図)

調査区中央の沢からまとまって出土したものである。沢の堆積土をメッシュにより取り上げた後土壌を洗別して抽出できたものと現場で取り上げたものとがあり、総重量は156.5gである。小さな塊状で光沢のあるものが多く、他に光沢がなく脆いものもある。

35は表面に皺が見られ、光沢がある。出土したアスファルト塊の中では最大のものである。36は非常に脆く、表面がザラザラし砂粒が付着したものである。35に比較して36は軽量である。

３　石器(第18・19図)

遺構外出土の石器には、石鏃、石錐、石匙、掻器、剥片がある。石質は、31が黒曜石である他は、すべて頁岩である。

石鏃(１～22)：石鏃には、無茎(１～14)と有茎(15～22)のものがある。１～10は基部が湾曲しており、両面全面に押圧剥離を行っているが、１の主要剥離面には広く先行剥離面が残っている。３は未製品である。11･12は基部が直線的で、13･14は基部が丸みをもっていて両面に先行剥離面を残している。15～22の有茎石鏃では、鏃身の断面が菱形やカマボコ形を呈し、鏃身は茎部の２倍以上のものが多い。

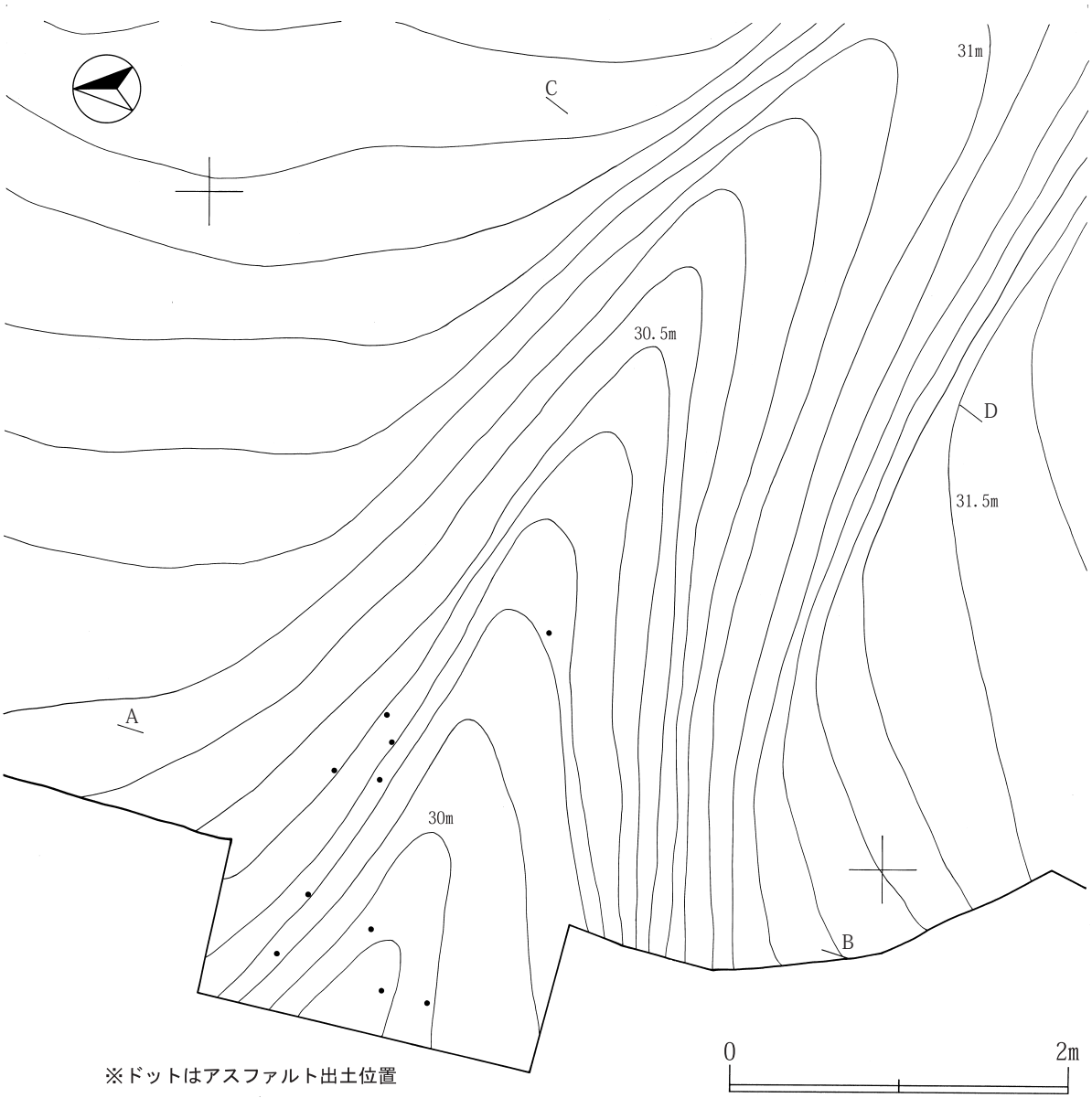
石錐(23)：素材剥片の両面に調整を行い、短い刃部を作出しており、刃部の先端は使用により丸く摩滅している。

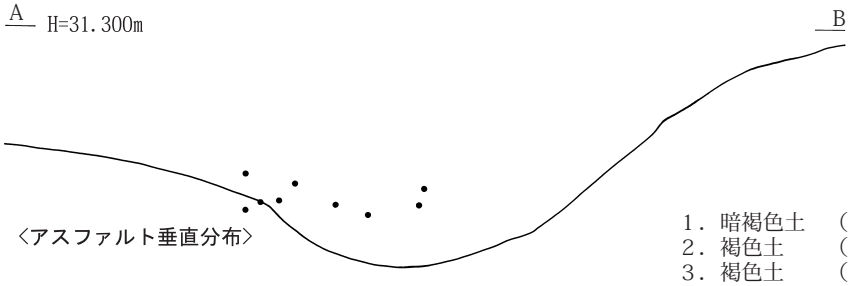
石匙(24～26)：24は主要剥離面の片側縁にのみ浅い剥離を施し、背面には丁寧な押圧剥離を施している。25･26はつまみ部を作出した後に、素材剥片の側縁にわずかに二次調整を行った未製品である。25が素材の打面をつまみ部としているのに対して、26ではつまみ部は片側縁に設けられる。

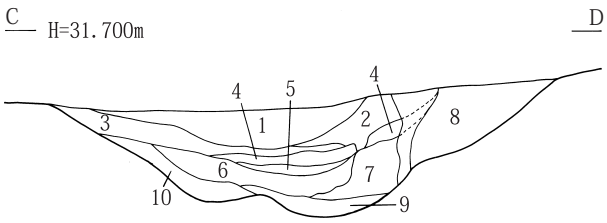
掻器(27～30)：素材剥片の形状を変えることなく、剥片の側縁に二次調整を行って刃部を作り出している。

剥片(31)：径２㎝ほどの球状の黒曜石から、長さ２㎝、幅１㎝ほどの剥片が２枚剥取されている。

黒曜石には透明感があり、気泡や節理面もない。

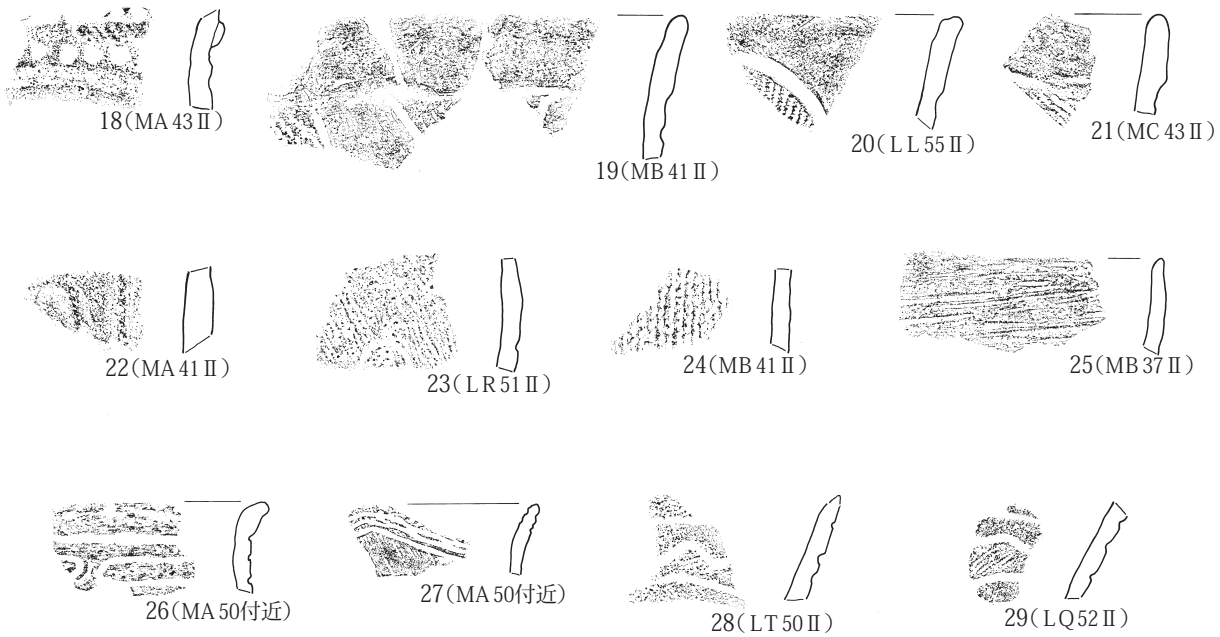






1．暗褐色土　（10YR 3／4）砂質土塊混入
2．褐色土　　（10YR 4／4）小礫混入
3．褐色土　　（10YR 4／4）小礫、炭化物混入
4．灰黄褐色土（10YR 5／2）小礫多量混入
5．黒褐色土　（10YR 3／1）小礫、炭化物微量
6．暗褐色土　（10YR 3／4）小礫、炭化物多量
7．褐色土　　（10YR 4／4）炭化物多量
8．にぶい黄褐色土（10YR 5／4）地山粘土混入
9．暗褐色土（10YR 3／3）小礫混入
10．褐色土　（10YR 4／6）地山粘土混入

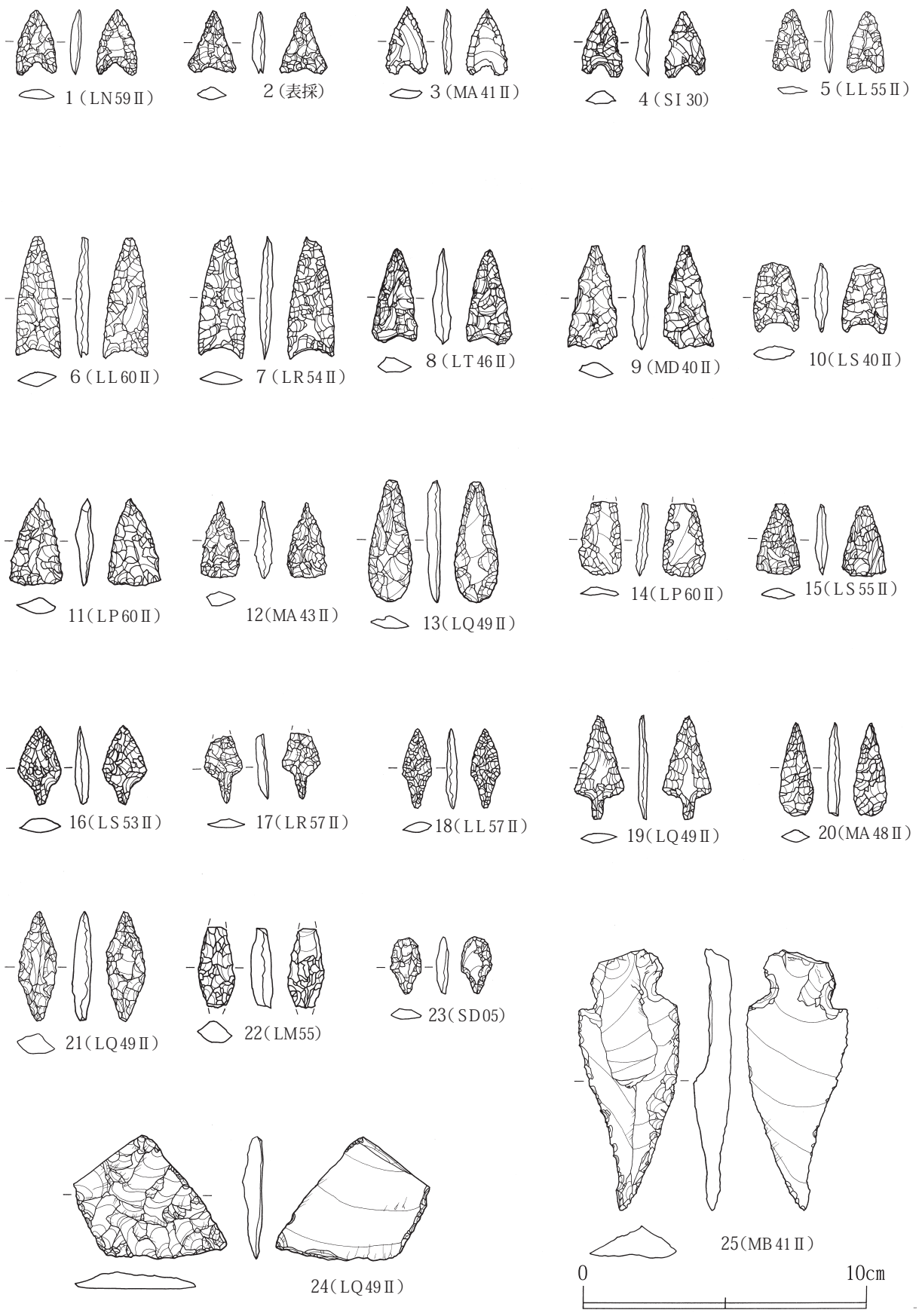
第16図　アスファルト出土地



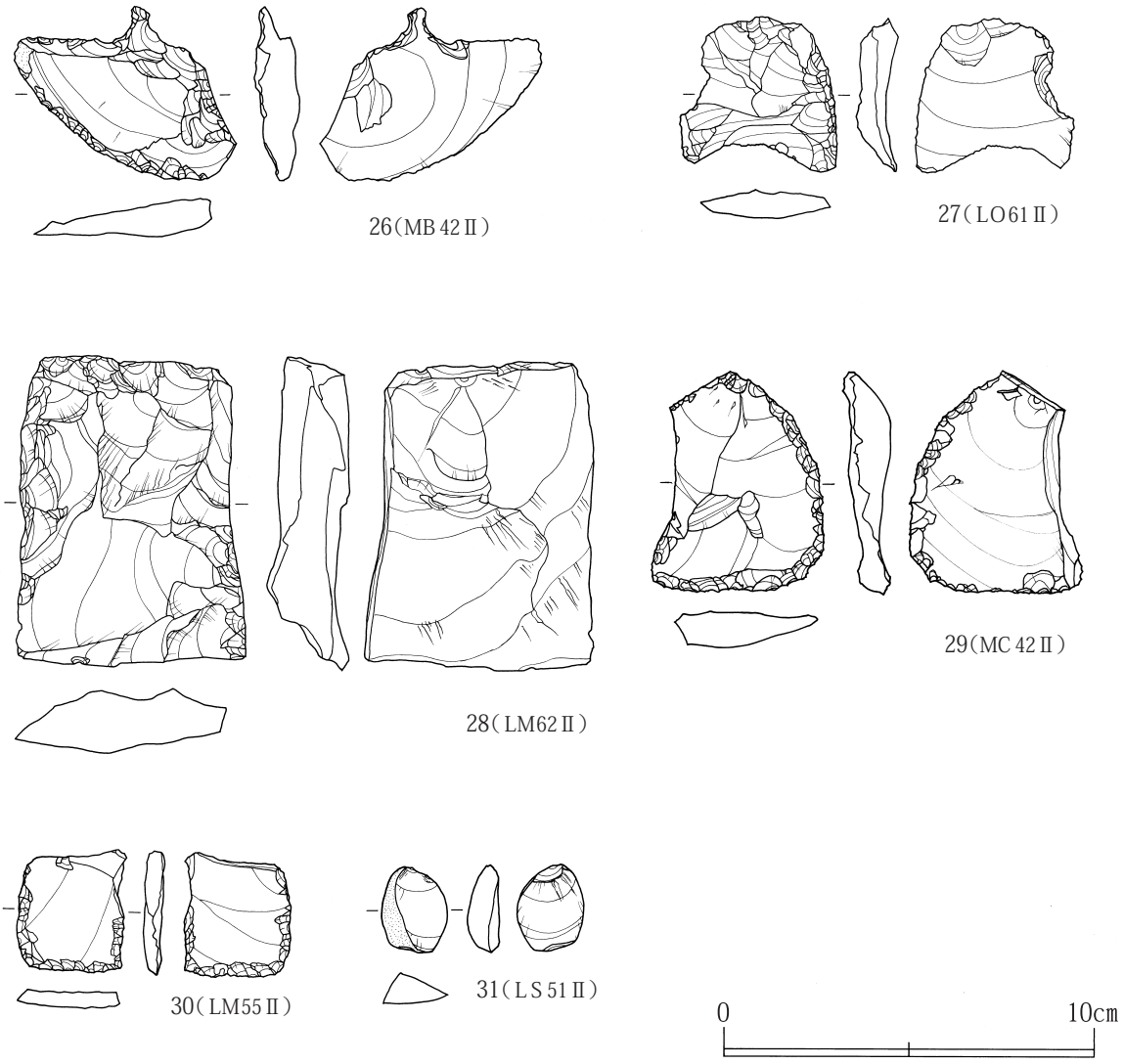
出土アスファルト一覧

番　号	重量（g）
SD06-10	0.7
15	8.6
16	0.1
17	35.5
34	3.4
40	7.1
41	0.7
49	6.7
50	3.4
51	1.0
58	3.2
59	4.4
73	5.9
メッシュ08	14.9
10	8.1
13	1.0
15	12.1
17	39.7
合　計	156.5

第17図　遺構外出土遺物（1）



第18図　遺構外出土遺物(2)



第19図　遺構外出土遺物（3）

表2　土器・土製品・アスファルト塊観察表

挿図番号	出土位置	器　種	器　形	層　位	法　量（cm）			調　整・施　文	備　考
					器　高	最大径	底　径		
14-1	ＳＩ30	土師器	甕			24.0		内外面：ロクロナデ（横）	
14-2	ＳＩ30	土師器	甕			16.2		内外面：ロクロナデ(横)	
14-3	ＳＩ30	土師器	甕				5.8	内外面：ロクロナデ（横）	
14-4	ＳＩ30	須恵器	甕					内外面：ロクロナデ（横）。唇部に稜。	
14-5	ＳＩ30	須恵器	甕			15.6		外面：ロクロナデ(横）→タタキ目、 内面：ロクロナデ(横）→タタキ目	
14-6	ＳＩ30	須恵器	坏		8.0	15.8	9.4	内外面：ロクロナデ（横） 底部：回転ヘラ切り、高台付き	
14-7	ＳＩ30	須恵器	坏		3.2	13.0	5.8	内外面：ロクロナデ（横） 底部：回転ヘラ切り	焼き膨れ
14-8	ＳＩ30	土師器	坏				7.4	内外面：ロクロナデ（横） 底部：回転ヘラ切り、高台付き	堅緻
14-9	ＳＩ30	須恵器	蓋			16.8		内外面：ロクロナデ（横）	赤褐色
14-10	ＳＩ30	須恵器	蓋			14.4		内外面：ロクロナデ（横）	
14-11	ＳＤ05	縄文土器	深鉢					外面：RL	
14-12	ＳＤ05	縄文土器	深鉢					外面：RL	
14-13	ＳＤ05	縄文土器	深鉢					外面：RL	
14-14	ＳＤ05	須恵器	甕					内外面：タタキ目	
14-15	ＳＸ05	須恵器	壺				9.0	内外面：ロクロナデ（横） 底部：ヘラ切り、高台付き	底部内外面に 黒色付着物
14-16	ＳＩ30	須恵器				7.7		内外面：ナデ	表面に黒色部
15-17	ＳＸ45	須恵器	甕		44.8	41.5		内外面：口縁部　ロクロナデ（横）→体部 ・底部　タタキ目	外面口縁部に 「九」の刻文
17-18	ＭＡ43	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：半截竹管状文（横）→粘土紐（横）	
17-19	ＭＢ41	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：口縁部　ナデ（横）→体部　沈線、 縄文	
17-20	ＬＬ55	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：口縁部　ナデ（横）→体部　沈線、 縄文	
17-21	ＭＣ37	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：口縁部　ナデ（横）→体部　沈線、 縄文	
17-22	ＭＡ41	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：隆帯（細、縦）	
17-23	ＬＲ51	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：RL（縦）	
17-24	ＭＢ41	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：RL（縦）	
17-25	ＭＢ37	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：ナデ（横）	
17-26	ＭＡ50	縄文土器	深鉢	Ⅱ				外面：沈線	
17-27	ＭＡ50	弥生土器	鉢	Ⅱ				外面：刷毛目（横・斜め）→沈線、 内面：刷毛目（横）→沈線	
17-28	ＬＴ50	弥生土器	鉢	Ⅱ				外面：縄文→沈線	
17-29	ＬＱ52	弥生土器	鉢	Ⅱ				外面：縄文→沈線	
17-30	ｱｽﾌｧﾙﾄ出土地	縄文土器	深鉢				10.0		表面脆い
17-31	ＬＱ51	弥生土器	鉢	Ⅱ			5.8		胎土キメ細かい
17-32	ＬＱ51	弥生土器	鉢	Ⅱ			7.2	外面：LR	
17-33	ＬＰ51	弥生土器	鉢	Ⅱ			5.6	外面：LR	
17-34	ＭＢ35	不明	坏形	Ⅱ			8.2	内外面：ロクロナデ（横）→磨き？ 底部　高台付き（削り出し？）	胎土に海綿状 骨針
17-35	メッシュ17	縄文							アスファルト塊
17-36	メッシュ 8	縄文							アスファルト塊

表3　石器観察表

挿　図　番　号	出　土　地　区	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）
18-1	ＬＮ59Ⅱ	23	14	4	1
18-2	表採	22	17	4	0.9
18-3	ＭＡ41Ⅱ	23	15	3	1
18-4	ＳＩ30	24	14	5	0.9
18-5	ＬＬ55Ⅱ	22	13	3	0.6
18-6	ＬＬ60Ⅱ	42	16	5	2.7
18-7	ＬＲ54Ⅱ	43	17	4	2.9
18-8	ＬＴ46Ⅱ	33	16	6	2.5
18-9	ＭＤ40Ⅱ	36	18	5	2.5
18-10	ＬＳ40Ⅱ	4	16	5	1.8
18-11	ＬＰ60Ⅱ	31	18	6	2.6
18-12	ＭＡ43Ⅱ	27	14	6	1.6
18-13	ＬＱ49Ⅱ	43	15	5	2.9
18-14	ＬＰ60Ⅱ	26	15	4	1.4
18-15	ＬＳ55Ⅱ	25	15	4	1.2
18-16	ＬＳ53Ⅱ	27	5	5	1.3
18-17	ＬＲ57Ⅱ	23	13	3	0.8
18-18	ＬＬ57Ⅱ	28	10	4	0.8
18-19	ＬＱ49Ⅱ	36	17	3	1.4
18-20	ＭＡ48Ⅱ	33	12	4	1.4
18-21	ＬＱ49Ⅱ	38	14	7	2.9
18-22	ＬＭ55	28	13	8	2.8
18-23	ＳＤ05	20	11	4	0.8
18-24	ＬＱ49Ⅱ	43	54	7	11.9
18-25	ＭＢ41Ⅱ	92	36	13	27.2
19-26	ＭＢ42Ⅱ	47	60	12	18.9
19-27	ＬＯ61Ⅱ	42	43	11	14.9
19-28	ＬＭ62Ⅱ	84	62	22	109.4
19-29	ＭＣ42Ⅱ	60	47	3	29.9
19-30	ＬＭ55Ⅱ	33	29	5	7.2
19-31	ＬＳ51Ⅱ	24	18	9	2.8

第５章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

１．はじめに

元木山根Ⅱ遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

２．試料と方法

試料は、SD05ＬＳ50から採取した炭化物(クリ)1点、SD06北東底面から採取した炭化物(クリ)1点、SD06-⑮から採取した炭化物(クリ)1点、SK12から採取した炭化物(カエデ属)1点、SI 30-2区から採取した炭化物(ミズキ属)1点の併せて5点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した^{14}Ｃ濃度を用いて^{14}Ｃ年代を算出した。

３．結果

表4に、各試料の同位体分別効果の補正値(基準値-25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}Ｃ年代、^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}Ｃ年代値(yrBP)の算出は、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}Ｃ年代が、その^{14}Ｃ年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Ｃの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}Ｃ年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}Ｃ年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}Ｃ年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}Ｃ年代を算出する。

^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB4.3(CALIB3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}Ｃ年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４．考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p3-20.

Stuiver,M.and Reimer,P.J.(1993)Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program,Radiocarbon,35,p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G,S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M.(1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP,Radiocarbon, 40,p.1041-1083.

表４　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$（‰）	^{14}C年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1677（AMS）	炭化物 No.1（クリ）SD05 LS50	-27.7	1090±25	cal AD 980	cal AD 900 - 920 (37.3%) cal AD 955 - 995 (62.7%)
PLD-1678（AMS）	炭化物 No.2（クリ）SD06 北東底面	-25.4	5750±30	cal BC 4585 cal BC 4565 cal BC 4555	cal BC 4670 - 4660 (12.3%) cal BC 4650 - 4640 (11.5%) cal BC 4620 - 4545 (76.1%)
PLD-1679（AMS）	炭化物 No.3（クリ）SD06-⑮	-26.6	4050±30	cal BC 2575 cal BC 2510 cal BC 2505	cal BC 2620 - 2610 (11.6%) cal BC 2585 - 2560 (30.6%) cal BC 2535 - 2495 (48.6%)
PLD-1680（AMS）	炭化物 No.4（カエデ属）SK12	-25.6	1235±30	cal AD 775	cal AD 720 - 745 (33.4%) cal AD 765 - 780 (18.3%) cal AD 790 - 825 (30.9%) cal AD 840 - 860 (14.4%)
PLD-1681（AMS）	炭化物 No.5（ミズキ属）SI30-2区	-28.1	1255±30	cal AD 725 cal AD 740 cal AD 770	cal AD 690 - 705 (13.5%) cal AD 710 - 755 (60.5%) cal AD 760 - 780 (25.9%)

第２節　出土炭化材の樹種同定

１．はじめに

ここでは、SK12とSI30-2区から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定(AMS法)が実施され、いずれの試料も8世紀後半頃の年代値が報告されている(別報参照)。

２．炭化材樹種同定の方法

同一試料中に複数破片が含まれている試料については、各破片を調査した。先ず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつけ、次に材の３方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で材組織を拡大して観察を行い、同定した。

走査電子顕微鏡の試料は、３断面を５mm角以下の大きさに整え、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

３．結果

表５に同定結果を表示した。SK12からはカエデ属・サクラ属・クリ、SI30-２区からはミズキ属が検出された。いずれも、温帯落葉広葉林を構成する代表的な樹種であった。当遺跡は低山地の緩斜面に立地しており、温帯落葉広葉樹林帯地域であることからも、出土炭化材は遺跡周辺の森林を利用していたものと類推される。

以下に同定根拠を記載する。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版７　１a（SK12）

節部または材が曲がった部分の薄い破片であった。横断面の管孔配列はクリ材の典型的な配列ではなかったが、年輪の始めに中型の管孔が分布し徐々に径を減じてゆき晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列している。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は２細胞幅のものも見られたが主に単列同性で、集合状の放射組織は見られなかった。このような形質から、クリと同定した。

サクラ属　Prunus　バラ科　図版７　２a-２c（SK12）

放射方向の径(半径に近い)が1cmで、細い丸木の破片または材の中心部が残った炭化材とも推定される。

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後は斜状・波状に複合し分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、約4細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

カエデ属　Acer　カエデ科　図版７　３a-３c（SK12）

放射方向の径が５mmの薄い破片であるが、年輪のカーブは緩やかであることからやや太い材の一部破片と推定される。

小型の管孔が単独または２～３個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚が等間隔で走る。放射組織は同性、１～３細胞幅、道管との壁孔は交互状に整然と配列している。

ミズキ属　Cornus　ミズキ科　図版７　４a-４c（ＳＩ30-2区）

放射方向の径が約1.3cmで7年輪が計数できる破片で、直径3cmの丸木またはそれ以上太い材の中心部の材破片と思われる。

やや小型で孔口が丸い管孔が単独または２～３個が複合して分布する散孔材。年輪界の管孔は小型となる。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が15以上の階段穿孔である。放射組織は異性、１～３細胞幅、多列部は平伏細胞からなりその上下端に方形・直立細胞が単列である。

表５　出土炭化材樹種同定結果

試　料	樹　種	備考（14C試料No.）
SK12	カエデ属	放射径4mm 破片　（PLD-1680）
	サクラ属	放射径1cm 樹芯部破片
	クリ	節部薄片
SI30-2区	ミズキ属	放射径1.3cm 破片　（PLD-1681）

第６章　まとめ

元木山根Ⅱ遺跡は、南北に長く張り出した丘陵の中腹に立地する遺跡である。この丘陵には多くの遺跡が存在しており、発掘調査が行われたものも少なくない。

今回の発掘調査では、縄文時代では天然アスファルト塊、古代では竪穴住居跡とそれに伴って形が歪んだ須恵器が出土したことに注目したい。調査区中央部にある沢の西側から天然アスファルト塊（総重量156.5g）が縄文時代後期前葉の土器とともに出土した。仙北郡田沢湖町の潟前遺跡では縄文時代後期前葉の深鉢形土器に入った状態で2,490gの天然アスファルトが検出されている。このアスファルトに比較すると本遺跡で検出したものは光沢があり、小粒なものが目立っている。沢の堆積土に混在して検出したものであり、周辺に同時代の遺構が存在しないことからも原位置については不明である。また、今回の調査では土器、石器にアスファルトが付着したものは出土していない。

遺跡の東側には豊川油田があり、縄文時代に天然アスファルトが湧出していたことが知られており、遺跡内に自然湧出した痕跡がないことから、油田地帯から遺跡に持ち込まれたものと思われる。表面の状態が光沢のあるものとくすんだものがあり、加熱・非加熱によるものであるとすれば当時の使用法を解明する手掛かりとなると思われる。

調査区南端では古代の竪穴住居跡を検出した。隣接する大平遺跡では８世紀末から９世紀前半、平成11年度調査の元木山根Ⅱ遺跡では９世紀前半の集落が検出されており、本遺跡で検出した竪穴住居跡の遺物群も概ねこの時期のものと考えられる。

第15図の須恵器は器形が全体的に歪んでいる甕である。住居に隣接する場所からまとまって出土したもので、一部を欠損しているがほぼ完形のものである。焼成時に窯内の温度調整に失敗したため歪みが生じたと考えられる。形が歪んだり、焼き膨れの見られる須恵器はこの他にもあり、一般的には製品とはなりえないものと考えられる。しかし、住居周辺から出土していることから、当時この場所で使用されていたと推定される。

大平遺跡では、８世紀第２四半期から第３四半期にかけての炭焼窯跡が検出されており、須恵器窯跡や製鉄関連遺物の存在が予想され、秋田城と係わっていた工人集団が居住していた可能性があるとしている。出羽北半部では８世紀前半代から須恵器の生産が開始されたと考えられており、秋田市周辺では北側や東側で須恵器窯跡が見つかっている。秋田城の近くでは手形山窯が８世紀後半、古城廻窯が９世紀前半となっている。元木山根Ⅱ遺跡はこれらの窯跡と距離的にはやや離れた地点に位置している。出土した須恵器甕を焼いた窯が何処にあったのかは現時点では判然とはしないが、製品となりえない物という前提で考えれば、遠距離から持ち込まれたとは考えられず、大平遺跡で予想されている須恵器窯が付近に存在することを示唆している。

参考文献

秋田県教育委員会『潟前遺跡（２）－県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第306集　2000(平成12)年

小笠原正明・櫻田隆・能登谷宣康「二ツ井町富根字駒形不動沢地内のアスファルト滲出地について」『秋田県埋蔵文化財セ

ンター研究紀要』第14号　秋田県埋蔵文化財センター　1999(平成11)年

秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－』秋田県文化財調査報告書第329集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会『後山遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ－』秋田県文化財調査報告書第340集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ　毘沙門遺跡　六ツ鹿沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第309集　2000(平成12)年

岩見誠夫・船木義勝「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』35号　1985(昭和60)年

利部修「辺境における出羽北半の窯跡出土須恵器」『蝦夷・律令国家・日本海－シンポジウムⅡ・資料集－』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会　1997(平成9)年

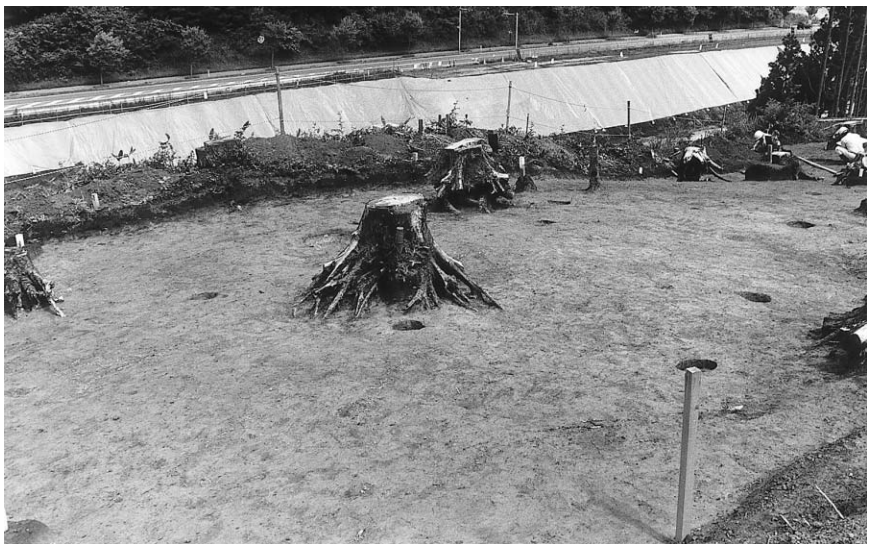
調査区近景
（北西から）

調査風景
（南西から）

SI30完掘
（西から）

図版2

SI30
須恵器壺
出土状況
（西から）



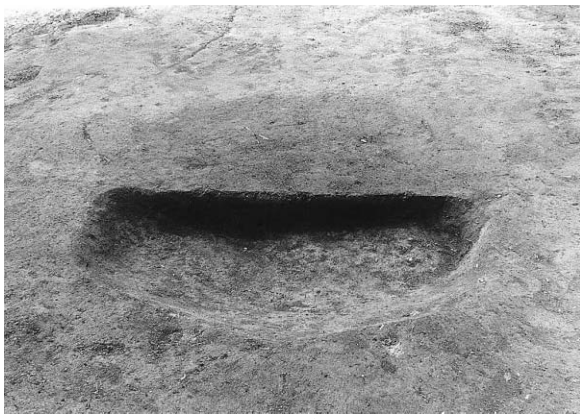
SB16完掘
（南から）

SX45
須恵器壺
出土状況
（西から）

SK01完掘（北東から）

SK04完掘（北西から）

SK12完掘（東から）

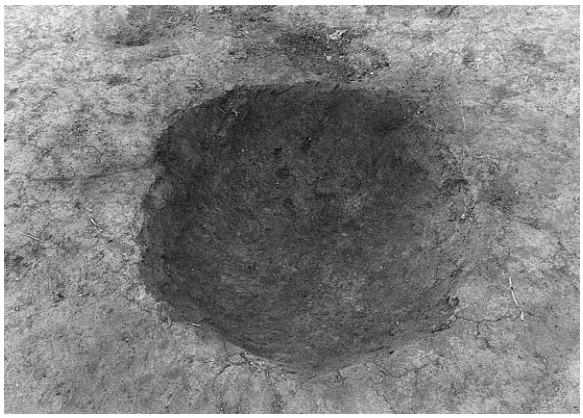


SK13断面（東から）

SK14断面（北から）

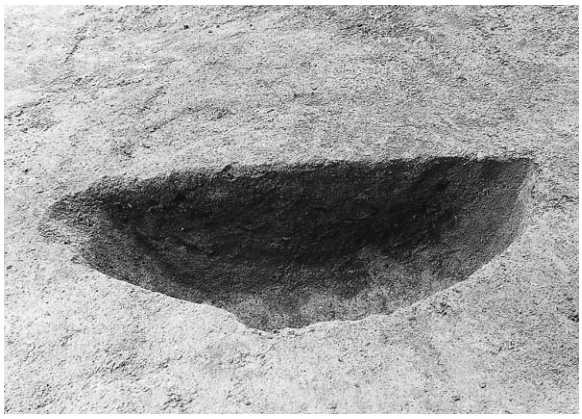
SK19完掘（南西から）

SK20断面（北から）



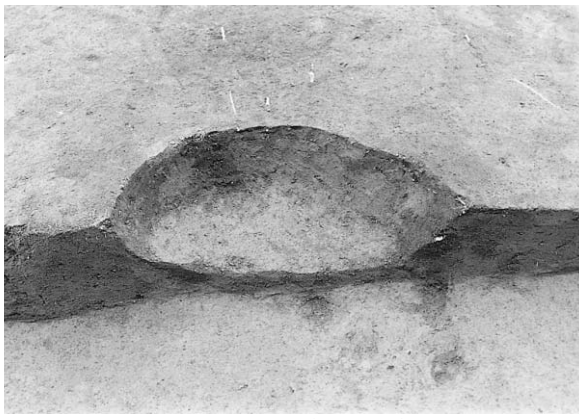
SK22完掘（南西から）

図版4



SK32断面（北から）

SK33完掘（南西から）

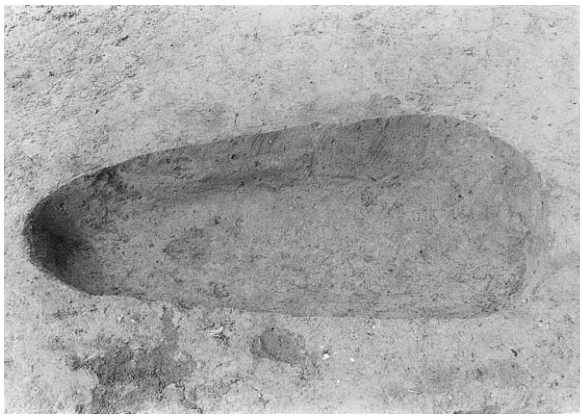


SK34完掘（東から）

SK35完掘（南から）

SK38完掘（南から）

SK39完掘（南から）



SK43完掘（南から）

SD05完掘
（北から）

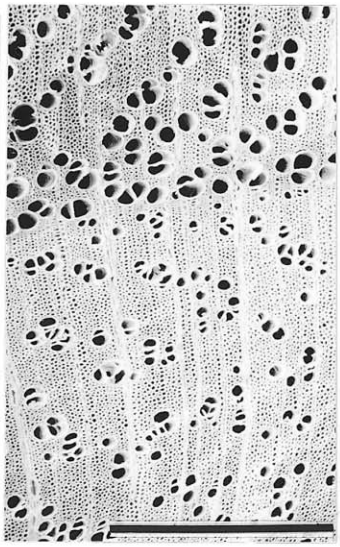
SD11完掘
（西から）

アスファルト出土地
（南東から）

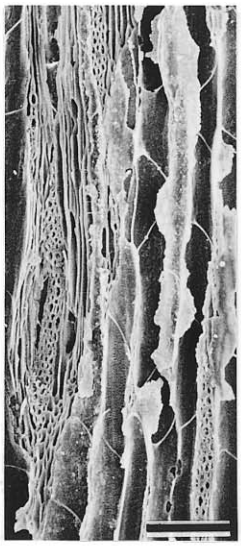
図版6

SX45出土遺物

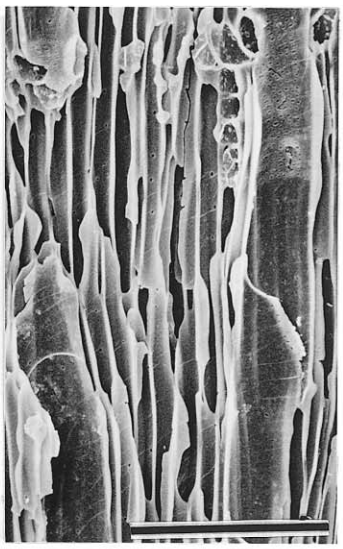
1a クリ（横断面）
ＳＫ12　bar：0.5mm



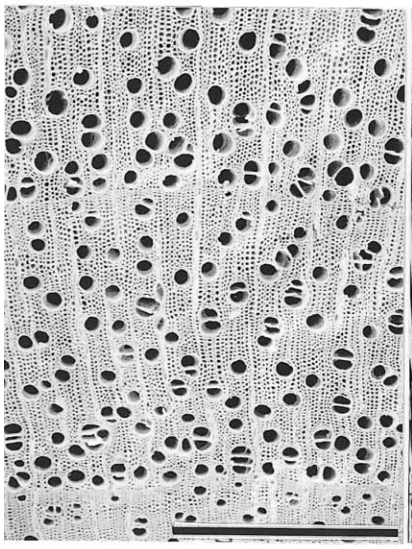
2a サクラ属（横断面）
ＳＫ12　bar：0.5mm



2b サクラ属（接線断面）
ＳＫ12　bar：0.1mm

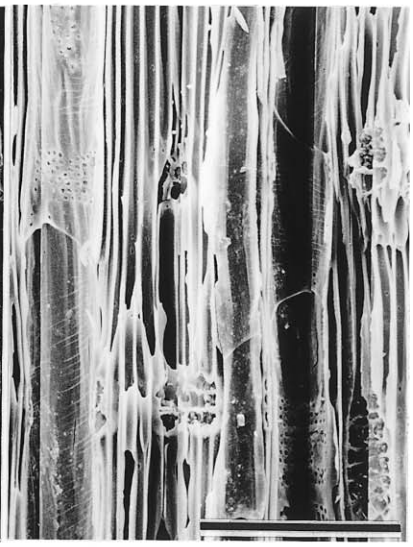


2c サクラ属（放射断面）
ＳＫ12　bar：0.1mm

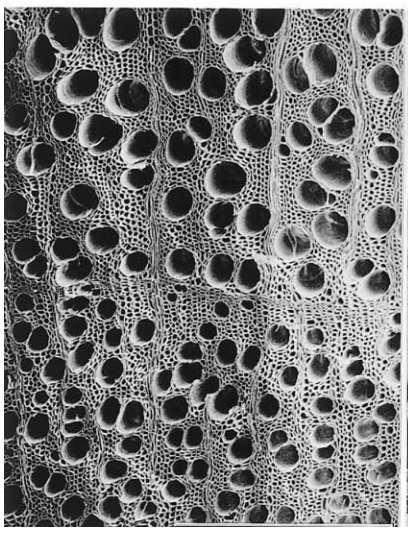


3a カエデ属（横断面）
ＳＫ12　bar：0.5mm

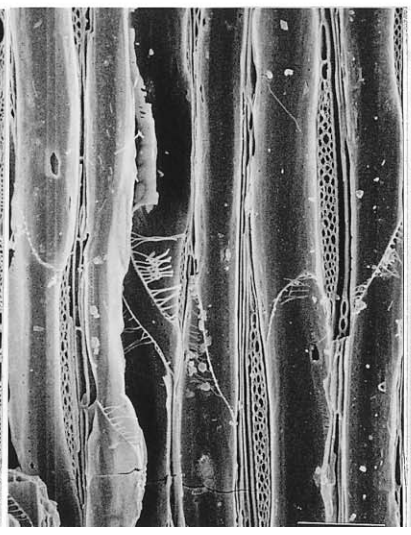
3b カエデ属（接線断面）
ＳＫ12　bar：0.1mm



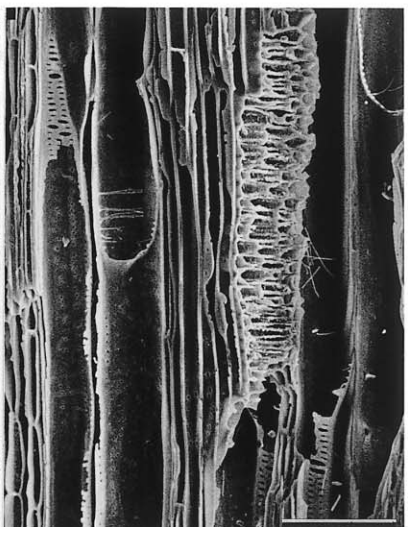
3c カエデ属（放射断面）
ＳＫ12　bar：0.1mm



4a ミズキ属（横断面）
ＳＩ30－2区　bar：0.5mm



4b ミズキ属（接線断面）
ＳＩ30－2区　bar：0.1mm



4c ミズキ属（放射断面）
ＳＩ30－2区　bar：0.1mm

報告書抄録

ふりがな	もときやまね に いせき
書　　名	元木山根Ⅱ遺跡
副 書 名	地域用水環境整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第362集
編著者名	磯村亨・西村正人・菊地与志人
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒014−0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL0187−69−3331
発行年月日	西暦2003年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
元木山根Ⅱ遺跡	秋田県南秋田郡昭和町大久保字元木山根39-6外	05362		39°51′30″	140°4′34″	20020527〜20020719	3,000m²	地域用水環境整備事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元木山根Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代・古代	竪穴住居跡1軒 掘立柱建物跡1棟 土坑15基 溝跡2条 性格不明遺構1基	縄文土器・石器 土師器・須恵器	平安時代の集落跡であり、出土した須恵器の特徴から窯跡が遺跡周辺に存在する可能性を指摘できる。

秋田県文化財調査報告書第362集

元木山根Ⅱ遺跡

－地域用水環境整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成15年3月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話0187(69)3331　FAX 0187(69)3330

発　　行　秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話018(860)5193　FAX018(860)5886

印　　刷　秋田活版印刷株式会社